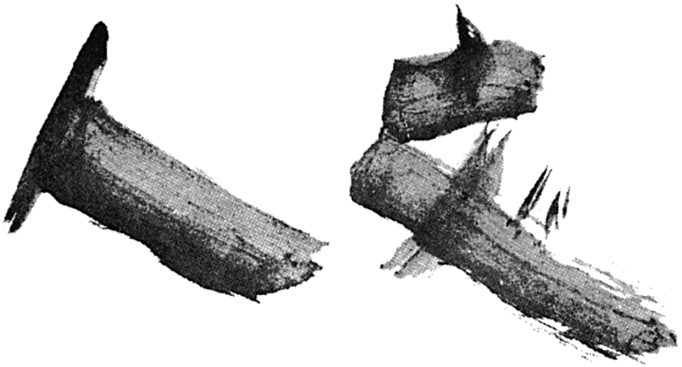


第 五 九 号

2012

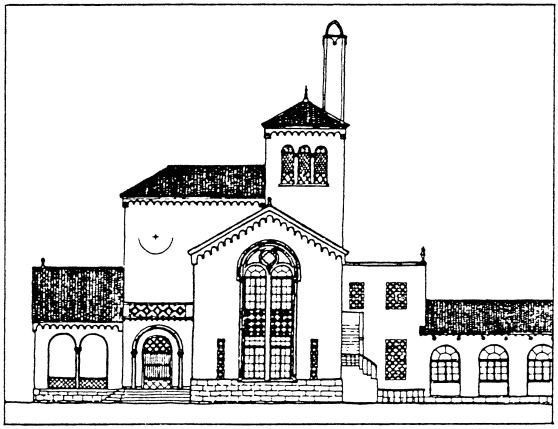
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389－147X

人　文　第五九号

2011年4月―2012年3月

も　く　じ



随想

記憶媒体 …… 森　時彦

一仕事終えて …… 王寺　賢太　8

講演

夏期講演講座 …… 8

道とは何か――『老子』河上公注を読む（古勝隆一）／色道手引きを読む――『難波鉦』――（横山俊夫）／化する「道」――飛田穂洲『野球道』を読む――（黒岩康博）

彙報 …… 15

共同研究の話題 …… 18

〈現代思想〉の今昔 …… 市田　良彦

近代古都研究班とフィールドワーク …… 高木　博志

私の「特殊コレクション」 …… 水野　直樹

『江南経略』風景好 …… 山崎　岳

古典中国語の形態素解析器を作る …… 守岡　知彦

所のうち・そと …… 27

研究の場 …… クリスティアン・ウィッテルン

グローバリストのいやしさ …… 矢木　毅

第一次世界大戦と二つの日本漫画 …… 高階絵里加

てったい …… 富永　茂樹

書いたもの一覧 …… 39

記憶媒体

森　時彦

たしか二〇〇〇年頃のことであったと記憶するが、ＩＴのすさまじい進歩の一例として、数年後には角砂糖くらいの大きさの記憶媒体が一〇〇テラバイトの容量をもつに至り、大英図書館の蔵書全てを収めることができるようになる、というような話を聞いたことがあった。まだメガバイト、せいぜいでギガバイトの単位にしか馴染んでいなかった当時としては、ムーアの法則をはるかに凌ぐ進歩のスピードに驚いたものである。コード入力にせよ、画像入力にせよ、図書資料という静止画を扱っているわたくしたちにとって、テラバイトという記憶容量は想像を絶するスペックであった。

しかしご存じのとおりＩＴの世界では、動画を処理する技術の進歩にともない、忽ちのうちにテラバイトが現実のものとなり、現在では普段使いのＰＣでもハードディスクはテラバイトの領域に入っている。ＵＳＢ経由の外付けハードディスクでも、文庫本の三分の二くらいの大きさで、一テラバイトあるいは二テラバイトの容量をもつものが現れている（この文章が掲載さ

れる頃には、さらに大きな容量が実現されているであろう）。

昨年、三～四月の二ヶ月間、牛大勇、王奇生両先生のお招きにより北京大学歴史学系の大学院で、中国紡績業史の演習を担当する機会にめぐまれた。牛先生の要求は、人文研の共同研究班での方式を北京大学に出前するような授業をしてほしいということであったが、準備期間が余りなかったこともあり苦肉の策として、初週の講義の時に、拙著『中国近代棉紡織業史研究』（袁広泉訳、社会科学文献出版社、二〇一〇年）の一章ずつを、中核となる受講生に割り当て、次週以降順次それぞれ学術誌に掲載できるようなレベルの書評を準備してくるよう指示した。授業の前半は、担当の受講生が準備してきた書評を報告し、後半は当方がそれに応答しながら補充説明をして、それぞれの章の理解を深めてもらうという方式で授業を進めることにしたのである。

各受講生の報告は、もちろん玉石混交ではあるが、概して言えば期待通り、若手研究者らしく率直で、的を射た内容であった。特に印象的であった質疑の一つは、一九二〇年代から三〇年代にかけての上海における綿糸相場のデータについて、担当の受講生はわたくしが二十年来閲覧したいと思いながら果たせなかった資料を見付け出してきて、時系列データとしてはこちらの方がよりリライアブルでないかと、的確に指摘してくれたことである。かつての中国では、一九四九年以前の図書は禁書扱いで、学生が閲覧することなど、まずほとんど不可能であっ

た。それがいまでは授業の準備のために、いとも簡単に利用する学生が現れたのである。

拙著執筆のために、それこそ日本、中国、欧米のさまざまな図書館を探し回って集めた資料を、北京大学の学生たちが苦もなく点検したうえに、拙著に利用できなかったより重要な資料まで紹介できるようになったのは、二〇〇二年から浙江大学が中心となって進めている高等学校中英文図書数字化国際合作計画（China-America Digital Academic Library, CADAL）の一環として、民国時期の図書、新聞、雑誌、二三万六千冊余りが電子化され、北京大学のような重点大学では学生まで含め、自由に閲覧できるようになっているからである。二〇〇九年から第二期に入ったこの計画は、名称を大学数字図書館国際合作計画（China Academic Digital Associative Library, CADAL）と改めて、第一期で達成した一〇二万三千冊に、三年でさらに一五〇万冊を加える電子化を目指しており、民国時期の図書もさらに一〇万冊増加することになっている。

北京大学の学生たちは、文庫本くらいの大きさの外付けハードディスクを持ち歩いて、必要とする民国時期の図書資料を手当たり次第にダウンロードして蓄積し、さらに友人たちとそれぞれがダウンロードしたファイルを、かつて子供たちが面子を交換したような感覚でコピーしあって、収蔵点数を倍々ゲームで増やしている。このような光景は、五月に茅海建先生のお招きで講学にいった上海の華東師範大学、一二月に桑兵先生のお

招きで講学にいった広州の中山大学でも遍く目にすることができた。

CADALに加え、中国知識基礎設施工程（China National Knowledge Infrastructure, CNKI）が提供する一九九四年以降現在までの学術論文、学位論文、年鑑類のデータベース、愛如生大型数据庫・近代報刊庫が提供する『申報』をはじめとする清末民国期の新聞雑誌のコードデータ、上海図書館の晩清期刊全文数据庫・民国期刊全文数据庫など、ハードディスクに収蔵できるデータベースは急速に増加しつつある。さすがにいまのところ小型化は角砂糖大までは進んでいないが、文庫本くらいの大きさの記憶媒体に、中国近代史研究に必要な図書、新聞、雑誌、アーカイブ、さらに研究書、論文などを網羅して持ち歩ける時代を迎えたといっても過言ではない。四〇年余りお世話になってきた人文科学研究所の蔵書から離れることになったわたくしにとっては、クラウドの充実ともどもまことにグッドタイミングのありがたいＩＴの進歩である。

一仕事終えて

王寺賢太

この春、長年続けてきた仕事をようやく終えた。パリの大学に提出した博士論文のことである。この仕事を始めたのは、フランス政府給費留学生としてパリに渡った一九九六年の秋だから、十五年以上もかかったことになる。その分、図体だけは大きな論文になった。本文八百頁、付録も入れると千二百頁を超える。総題は Malaise dans l'Europe moderne: Aux origines de l'*Histoire des deux Indes* de Guillaume-Thomas Raynal（「ヨーロッパ近代の不安　ギヨーム＝トマ・レナル『両インド史』の諸起源」）とした。現行の邦訳では『文化のなかの居心地悪さ』となっている、フロイトの著作のタイトルのもじりである。

十八世紀末のフランスで刊行されたレナルの『両インド史』は、大航海時代からアメリカ合州国独立までのヨーロッパの拡大の過程を扱う歴史書であった。もっぱら晩年のディドロが匿名で多数の寄稿をし、激しい奴隷制批判やアメリカ合州国独立への熱烈な支持を表明したことで知られている。従来ヨーロッ

パと非ヨーロッパの文化交流史や、ディドロの政治思想研究の観点から注目を集めてきたこの書物を、世紀中盤以来レナルが手がけてきたヨーロッパ国際関係史の延長線上に位置づけること、そして、それが旧体制に対抗する戦争機械と目されることになった理由を、ルネサンス以来のヨーロッパ政治――キリスト教圏の統一が崩壊した後、軍事力を独占する主権国家の分立のもとで、経済的生産と交換の論理に徐々に浸食されて行く政治―に対するレナルの懐疑にまで遡って考えること、これが論文の主眼である。その結果、私は奴隷制や合州国独立はおろか、ヨーロッパ人のアジア・アメリカの文明や未開との遭遇といった主題にも背を向け、同時代の通商論・植民地論から財政論・軍事論へ、さらにフランス王国の起源やルソー『学問芸術論』をめぐる論争へと手を広げることになった。

当初、『両インド史』の統一性を示すことを目標にしていたのを思うと、やり残したことは多い。しかし正直なところ、今はこの仕事をよくかたちにできたものだ、とほっとしている。一七七〇年代を通じて三度の改稿を重ね、ディドロを筆頭に複数の執筆者の協力を得てなった書物、古今の文献を渉猟し、それらを突き合わせ、組み合わせつつリライトしてなった書物――そんな書物を、どんなふうにひとつの対象として論じることができるのか。既に同時代から、論敵たちに数々の矛盾をあげつらわれてきたこの書物に、なんらかの一貫性を認めることなどできるのか。そんな疑問に苛まれながら、私はレナルや同

時代の数多くの書物に導かれ、かえって対象の大きさに圧倒されていっそう行き詰まることにもなった。レナルにとっては、一連の矛盾がある種の統一と裏表なもので、彼の政治学の核には、矛盾のなかで統一を維持することの困難があると考えるようになってからも、もう随分になる。

そんな仕事にどうにかピリオドを打つことができたのはひとえに、辛抱強く私につきあってくれたかつての指導教授らの学恩や、七年前に人文研に職を得てから、恵まれた研究環境のなかで出会ってきた同僚たちの助言や励ましのおかげだった。けれどもいま振り返ると、この長い仕事の節目節目で、自分がずっと一人だったことをしきりに思い出す。考えてみれば、『両インド史』を読み始めたのも、リュクサンブール公園の噴水も凍りつく厳冬のパリの、誰もいない薄暗い図書館でのことだった。私の「地獄行き」はあそこから始まったのだ。自分ももう、さまざまな屈託や野心を抱えたあの若い男の子ではない。あんな孤独な経験は、できればもう二度としたくはないとさえ思う。とはいえ、これからもこの仕事を手にとるたびに、折りに触れて、あの冬の寒さの印象を思い起こすことになるような気がしている。

講演

夏期公開講座

道とは何か

――『老子』河上公注を読む

古勝隆一

道は知りがたく、把握しがたい。『老子』第二十五章に「物有り混成し、天地に先立ちて生ず。寂たり寥たり、独立して改まらず、周行して殆うからず。以て天下の母と為すべし。吾その名を知らず、之にあざなして道といい、強いてこれが名を為して大という」、と。天地に先立つものでありながら、名づけることさえ難しいもの、しいてアザナをつけるなら、「道」ということになる、と。単なる道路どころの話ではない。

このような「道」についての思索は、先秦時代から漢代にかけて、道家と呼ばれるグループにより深められた。たとえば『淮南子』原道訓に「まことに道は、天の天、地の地なるもの。四面八方にせり出し、果てもなく高く、底知れず深く、天地を抱き無形にいのち注ぐもの。ああ、泉と湧き源と溢れれば、空洞もやがて満ちわたり。蕩々とほとばしれば、混濁もやがて澄みわたる」というのは、道の美しい表現である。そして、そのような道家の「道」をもっとも正しく語り、その核心にある著作だと認められてきた書物こそが『老子』であった。

同じく先秦時代から漢代にかけての頃、大きな力を持っていたもう一つの思想集団として、儒家があり、儒家も道に言及している。『論語』里仁篇に、「子曰く、朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」というのも知られるが、しかし道の探究という点において、儒家はとうてい道家に及ばない。

『史記』を書いた司馬遷の父、司馬談は、道家思想への深い思いを抱いており、そのことは『史記』の太史公自序にも描かれている。そしてもちろん、『史記』の中にも老子という人物の伝記が書かれている。しか

し、その伝記がきわめて混乱しており、実態をほとんど想像できない。司馬遷の時代においてすら、老子の人物像は不明瞭であったらしい。後世、それがますます混乱したのも、無理のないことであった。

老子なる人物の伝記が謎めいているのみならず、『老子』という書物の内容や、その中心に位置する道の思想もつかみがたい。そこで説明や注釈が求められた。後世、前漢の河上公なる人物が書いたという注と、魏の王弼が書いた注とが、『老子』解釈の二本の大きな柱となったが、前者の河上公注は、たいへんに興味深い『老子』観を示している。

そもそも河上公とは如何なる人物であるのか。河上公注『老子』につけられた、葛玄の序という文章によると、河上公は姓名未詳、前漢の文帝の時に黄河の岸辺に隠居して、『老子』を読み解いていた。文帝は、河上公が『老子』に通じていると聞いて召し寄せようとしたが、「そんなことでは道や徳は教えられない」と河上公が上京を拒むので、しかたなく文帝みずからが出向いてその非礼を責めたところ、河上公は手を打ってふわりと虚空に浮かび上がり、自分は帝王の指図を受けぬと宣言する。そこで文帝は河上公が神人であると悟り、礼を尽くして教えを乞うたところ、河上公は『老子道徳経章句』二巻を文帝に授け、「これをよく研究すれば、『老子』は分かるだろう。余がこの経に注をつけて以来、千七百年になるが、伝授したのは、あなたを含めて四人だけだ。人には見せるな」と言った。伝授を終えると、河上公はどこかに消えた。そのように説く。河上公もまた、謎に満ちた人物である。

上記の逸話は、もちろん作り話に違いない。河上公注ができたのは、後漢の頃だという学者もあれば、南北朝の頃だという学者もある。その成書年代はともかく、内容には著しい特徴がある。それは道の思想を、国を治める政治思想としてとらえると同時に、自分の身体を治めるための思想ともみなしている点にある。『老子』冒頭の第一章に「これが道だといえるような道、それは常なる道ではない」とあるが、河上公によると、「これが道だといえるような道」とは政治の道のことで、他方、「常なる道」とは自然長生の道であるという。この「常なる道」に従うならば、自分の身体中にいる神を養うこともできるし、また同時に、民を治めることもできるのだ、そのように河上公は主張するのである。

これは非常におもしろい考え方だ。『老子』には、道に最も近い人間たる「聖人」の話題が頻出する。「聖人」とは、『老子』が書かれた頃の時代状況を背景に生み出された理想的人間像であるが、後世、聖人ど

ころか、政治に携わることすらない一般人が『老子』を読むようになると、「聖人」の話題はどこか現実離れしたものと感じられたのではないか。しかし河上公は、「聖人」が国を治めるのと、身体を治めるのは、別物ではなく同じである、と、そのように説いた。こうして『老子』は、広い読者層にとって魅力的な書物となり得たのである。

このような『老子』読解は、曲解として片付けるわけにいかないところがある。というのも、中国思想の伝統には、自分にとって身近なもの、特に身体、それの類似として、政治や、宇宙の構造、そして万物の成り立ちをとらえる、そのような発想が濃厚にあるからだ。河上公の『老子』解釈をそういう伝統の中に置いてみると、あまり違和感なく自然に読める。もちろん、『老子』の作者がそういうつもりで書いたかどうかは、まったくの別問題であるが、ただ、河上公注のような『老子』解釈が後に生まれ、それが広く受け入れられたということは、吟味するに足る、中国思想史上の事実であると思うのである。

色道手引きを読む

――『難波鉦』――

横山俊夫

「つよい男と知って続けて会うのはわかる。しかし、よわい男と見ながら重ねて会うこともしている。どういうわけか。」――なじみ客の問いかけに、遊女初嶋が手くだのほどを明かす。『難波鉦』は十七世紀後半の大坂新町の廓が舞台。その奥座敷での語りという設定の百話から成る。おもに、一人の銅鑼息子の質問に一人の遊女が答える趣向。ただ、遊女たちは用心深い。そこまで打ち明けるのかと思いきや、「……と聞きました」とつけ足す。受け売りをよそおうのも閉鎖社会に生きる智恵であろう。

初嶋が登場する一話は「諸手縄」と題されている。さて、初嶋の答え。まず、「つよい」「よわい」は「物ごと手あつい」かどうかで見わけると。財力はもちろん、廓で働く老若男女への気くばりがゆき届かなければ「つよい」とは目されない。当時の通語、「いき」や「はり」にも叶う勢いのありようであろう。ただ、

つよい男には、当座の「なぐさみ一遍」組と「根ふかくする」組がある。前者なら、鎌かけや恨みくねりなどの「おひかけ」の手を休めず、「追従軽薄」も駆使して宴をかさねさせ、破産に追い込むことも。後者と見極めれば、時には振りつつ、月に三、四度は会う。そのときは「しんじつらしく」自分の考えを語り「末とぐ（遂）るやうに」すると。

では、よわい男のあしらいはどうか。こちらはまず、遊女自身のしばしの「なぐさみ」とするか、「つづかせる」かの見分けを。前者なら、「ひたひたといくつも続けておひかけ、そのまま踏み落として取ります」と。ウーンと唸るのは早い。「…こともござんす」と続く。さらに言う。自分たちはこのようなことはしないと。「やり手などが見あわせてする、と聞きました」とのこと。

さて残る男の存在こそが、冒頭の問いであった。初嶋はいう。「なるほどいとおしがりて、おひかけず、月に壱つ弐つほどづつ」会うと。のみならず、「折々は呼び寄せて横を切らせ」、つまり他客の座を抜け出しての密通も。散財させず、「あとまでおとこの数にいれて続か」せる工夫である。なぜそこまで。答え――「女郎の盛ん（繁昌）のためにします」。さらりと口がすべった。あわてて、「…も有」りますとつくろう初嶋。百話のうちの六十四番目にこの話が出るのは、易卦の一巡を考えてのことか。よわい男とて、遊女の役に立ち、ひいては廓の賑わいにも寄与するのである。

じつは、このような男の姿と呼応する記述が、『難波鉦』出版と同じころに藤本箕山が書き進めていた大著『色道大鏡』の巻五にある。この巻は法華経二十八品になぞらえての、男客の品さだめ。その「中央」の第十四「催興品（さいけうほん）」の「従人相（じゆじんさう）」。この相は「ますます徳たかく勢つよき人」には顕れず、「年々当道に労をつみ、身の上もむかしより軽く」ならなければという。ちなみに、色道の入り口近くから第六「瓦智品（くわちほん）」あたりまでが陽気さかんな自賛高慢の諸相。廓もこぞっておだてる。やがて、破産、勘当と、難儀かさなり、仮病を構えればまことの病いにも沈んで、ようやくに陽気薄れる。そこに旧友あらわれ、説得されて廓に戻れば、「さしい出ずいさまず」の境地。そのあとに至るのが第十四品である。じつは奥には、老荘風の「大偽」や「等賤」や「玄妙」の品々から、円相と和歌でのみ示される「大極品（たいきょくほん）」へと道はるか。しかし箕山の筆は、この、つよからぬ中位の品を描いて力がこもる。この男は、「こころざしさわさわとし、をのれにわたくし無く、また人のこころをやぶら」ず、座が気

詰まりなときには、すかさず、皆が和むように心そだてもでき、あげ屋、やり手も喜び感じ入ると。

『難波鉦』が編まれた時代に、自らこのんで廓の「年季奉公」を選んだ女性は稀であろう。そのことを忘れては遊里書の解釈は深まらない。ただ、十七世紀なかば以降のこの種の書物の賑わいは、人類史のなかでも貴重な意味をもつのではないだろうか。「文明」を、文(あや)を織りなして輝く世ととらえる立場からすれば、廓中にあつまる丸腰の人間がくりひろげた多彩なかかわりあいの記述は、あたかも小規模な文明化のシミュレーション報告のごとくである。思えば近代の産業社会は、「つよき」をめざしてしのぎを削りあい、「勝ち組」のみ輝いて周囲に闇をひろげつつ、全体がどのような文を織りなすかを思わぬまま今に至った。近年、世界の多くの大学もいよいよその風儀に染まる――講座では、このような読みを提案し、「中ぐらい」をながめる視野をひろげてみた。それにしても、『難波鉦』の作者「酉水庵無底居士」とは誰か。あるいは藤本箕山その人ではないかと、「鉦」と「大鏡」の共通点をあげた。それが的中であることを、共同研究班で両書の輪読に長くかかわられた廣瀬千紗子氏が、数ヶ月後に証された。拙編『ことばの力』に寄せられた同氏の章の付記をご覧いただきたい。

大衆化する「道」

――飛田穂洲『野球道』を読む――

黒岩康博

大衆スポーツである野球と「道」はいつ結びついたのか？　玉木正之とロバート・ホワイティングの『ベースボールと野球道』（一九九一年）以降、元プロ野球選手名義のいくつかの本や、テレビゲームに「野球道」を冠するものが出され、現在では随分と人口に膾炙するようになった。それらの淵源、戦後「野球道」の始まりは、飛田穂洲忠順の寄稿「日本野球道の再建」（『朝日新聞』一九四五年一一月六日）であろう。ここで、「健全無比の野球を組み立てゝいかねばならぬであらう。野球経世の大理想を実現せん為に」と謳った飛田は、早稲田大学で選手と監督を経験した後、野球評論家として戦前戦後に健筆を揮ったが、この三年後にその名も『野球道』（話社）という単著をものしている。

飛田がここで語る「野球道」は、戦前のそれを継承し、発展させた点も多い。例えば、旧制一高が標榜し、

勝利至上主義・精神主義・集団主義を特徴とした「武士道野球」を、自らがＯＢである早稲田大学が継承していることを自負しつつ、「壮士」「東洋流の豪傑」「野武士」然とした粗暴な振る舞いを許さず、「煙草は選手の嗜好にまかせるが、公開の席上や街頭で用ゐてはならない。酒は断然禁止」と、師である安部磯雄の影響を受けて生活習慣も細かく指導している。そしてこうしたグラウンド内だけでは完結しない「野球道」を、最終的には「社会生活への第一條件は安部先生の教をそのまゝ他人に迷惑をかけぬと云ふことである。これが早稲田大学野球部の金科玉條であり、此の迷惑無用によつて、すべてを解決することが出来る」という境地へと導く。

しかし、一高由来である勝利至上主義の極度の裏返しと言える練習第一主義も、飛田「野球道」の特徴である。飛田は、「スポーツが、野球が健康や趣味の範囲を出ないものであるなら従来日本で行はれてゐた野球練習の如きは、殺人的のものであり、一日も早く追放令を発しなければならないであらう」と認めながら、「野球に練習といふものがなかつたら、いや死の練習ともいふべきものがなかつたら、野球位莫迦らしく他愛ないものはあるまい。それこそ「あの球投げか」といふ冷罵以外の何ものでもあり得ない」と練習にこそ意義を見出しており、野球という競技自体への評価はむしろ低い。ここにあるのは「苦しむ為めの野球、人間修業の野球」であり、国民の健康増進のためのスポーツという視点は皆無である。

そしてこれは容易にマゾヒズムや犠牲心の称揚へと繋がっていく。投球練習で腕が曲がった投手が「桜樹の枝にブラ下つて、その湾曲せる腕を矯め」て更に練習を続けたことを、飛田は「何んと素晴しい執心振り」と称賛し、「すべて我を捨て団体精神の中に溶け込んでいく」点に「団体競技の生命」があるという主張を延長し、「万年補欠とかベンチ・ウオマー」について、「在学幾年かを下積に甘んじ只管練習に精進した是等の不遇選手の中には実に立派な人物があり、華華しい球歴を持つ選手などより肚の出来た優秀者のあることを忘れてはならない」と、やはりグラウンド外の評価へと繋げている。

西山松之助は「芸道の道というのは、最も抵抗少なく、しかも無駄なく確実に、かつ速やかに目的地へ行くことの出来る通路として設定されてきたもの」とするが、右の如く過程での苦労を最重要視する「野球道」は、歌の道や弓馬の道とは異なる上、「芸道は、結局一人のもの」であり、「共同体の道ではない」（西山）という点でも、近世の芸道とは断絶している。こ

れは、日本の野球が学生野球を基盤として発展してきたというその来歴、つまり野球という競技から乖離した教育的意義や価値を見出さねばならなかったということが、大きな要因であろう。近年の学生野球を見ていると、状況は大幅に変わりつつあると感じられるものの、集団による「道」の追究という歪なかたちは、野球から派生して日本の団体スポーツ全般に深く根を下ろしている可能性は否定出来ない。飛田「野球道」の息の長さである。

彙　報

おくりもの

宮宅潔准教授は第八回日本学術振興会賞を受賞（二〇一二年二月二七日付）。

訃報

牧田諦亮元教授（九九歳）は、八月八日逝去。

人のうごき

。籠谷直人教授（人文学研究部）は、地球環境学堂に配置換（四月一日付）。

。横山俊夫教授（人文学研究部）は、当研究所に配置換（四月一日付）、その後定年により退職（二〇一二年三月三一日）。

。村上衛を准教授（東方学研究部）に採用（四月一日付）。

。岩井茂樹教授（東方学研究部）を当研究所長に併任（四月一日～二〇一三年三月三一日）。

。麥谷邦夫教授（東方学研究部）を附属東アジア人文情報学研究センター長に併任（四月一日～二〇一三年三月三一日）。

。岩井茂樹教授（東方学研究部）を附属現代中国研究センター長に併任（四月一日～二〇一三年三月三一日）。

。VITA, Silvio　イタリア国立東方学研究所長は、客員教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇一二年三月三一日）。

。JACQUET, Benoit Marcel Maurice　フランス国立極東学院京都支部長は、客員准教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇一二年三月三一日）。

。袁広泉　大学共同利用機関法人人間文化研究機構地域研究推進センター研究員は、客員准教授（附属現代中国研究センター、四月一日～二〇一二年三月三一日）。

。三成寿作を特定研究員（科学研究）に採用（四月一日付～二〇一二年三月三一日）。

。藤井俊之を助教（人文学研究部）に採用（十二月一日～二〇一八年十一月三十日）。

。白井哲哉特定研究員（科学研究）は、辞任の上（五月三一日付）、特定助教（新学術領域研究）に採用（六月一日～二〇一二年二月二九日）。

。山本奈津子を特定研究員（産官学連携）に採用（七月一日～二〇一二年三月三一日）。

。永田知之助教（附属東アジア人文情報学研究センター）は、辞任の上（九月三十日付）、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所研究員就任。

。吉沢剛を特任講師（新学術領域研究）に採用（十月一日～二〇一二年三月三一日）。

。向井佑介助教（附属東アジア人文情報学研究センター）は、辞任の上（三月三一日付）、京都府立大学文学部歴史学科講師就任。

。加藤和人准教授（人文学研究部）は、辞任の上（三月三一日付）、大阪大学大学院医学系研究科教授就任。

。梶原三恵子助教（人文学研究部）は、

辞任の上（三月三一日付）、東京大学大学院人文社会系研究科准教授就任。

。森時彦教授（東方学研究部）は定年により退職（二〇一二年三月三一日）。

海外での研究活動

（原則として30日未満のものは割愛した。）

。森時彦教授（東方学研究部）は、二〇一一年三月二日大阪発、北京大学、南開大学及び華東師範大学・上海市地方志弁公室に於いて中国紡績業に関する講義、研究打合せ及び資料収集を行い、塘沽砲台遺跡博物館に於いて第二次アヘン戦争に関する現地調査を行い、五月八日帰国。

。石井美保准教授（人文学研究部）は、一部文部科学省科学研究費補助金により七月十七日大阪発、エディンバラ大学に於いて「南インドにおける心霊祭祀と憑依儀礼」に関する文献研究、研究発表、「植民地期ならびに独立後インドにおける社会運動と宗教運動」に関する文献研究及び、「宗教実践と身体およびパフォーマンス論」に関する研究を行い、ロンドン大学に於いて英国におけるアフリカおよびインド研究の系譜に関する調査研究を行い、九月二四日帰国。

。王寺賢太准教授（人文学研究部）は、文科省科学研究費補助金により七月二七日大阪発、グラーツ大学に於いて「国際十八世紀学会」に参加、聴講及び発表を行い、フランス国立図書館に於いて、十八世紀フランス戦争論及び十八世紀フランス財政論に関する資料調査を行い、九月二九日帰国。

。藤井正人教授（人文学研究部）は、五月十八日成田発、ハーバード大学に於いてサーマ・ヴェーダに関する共同研究を行い、九月十二日に一時帰国、九月十九日再出国、ユーロアジア・アフロアジア研究センターに於いて国際ヴェーダ学ワークショップに参加及び論文発表を行い、九月二五日帰国、九月二八日再出国、ハーバード大学に於いてサーマ・ヴェーダに関する共同研究を行い、十月二八日帰国。

。船山徹教授（東方学研究部）は、八月三一日大阪発、プリンストン大学に於いて仏教史講義および懺悔の文化史に関する資料収集と共同研究を行い、十二月三一日帰国。

。金志玹助教（東方学研究部）は、九月一日大阪発、香港中文大学に於いて唐代道教儀礼に関する共同研究及び調査を行い、二〇一二年一月二二日帰国。

。山崎岳助教（東方学研究部）は、文科省科学研究補助金により二〇一二年二月八日大阪発、国家図書館、漢喃研究院及びハノイ国家大学に於いて、明清時代中越関係に関する文献調査を行い、三月二五日帰国。

外国人研究員

。SPECTOR, Celine　ボルドー第三大学、哲学科准教授

「正義感覚」概念の生成と用法

（文化生成研究客員部門）

受入教員　王寺准教授

期間　四月十五日～七月十五日

。HADOLT, Bernhard　ウィーン大学、社会・文化人類学教授

臨床遺伝学の文化人類学的研究

（文化生成研究客員部門）

受入教員　田中教授

期間　七月二十日～十月二十日

。胡　令遠　復旦大学日本研究センター
教授　副所長
戦後における中日文化交流とそれが中
日関係に及ぼした影響
（文化連関研究客員部門）
受入教員　山室教授
期間　七月二五日～
二〇一二年一月二十日

〈現代思想〉の今昔

市田良彦

三十年近く前のことになる。私は二つの共同研究班の文字通り末席を汚していた。樋口班、阪上班のなかで、私はまだ定職も得ていない最年少のメンバーであった。プロの研究者たちの議論を、我が身の無知を噛み締めながら、ほとんど見上げていたものだ。それが、学外者のままとはいえ、班長（「ヨーロッパ現代思想と政治」班）としてここへ戻って来ようとは。最初はたんに仕事の都合で京都に通えなくなっただけであったのに、様々な機縁に導かれて研究活動の場を移しているうちに、私は「人文研共同研究」の浦島太郎になっていた。研究班がスタートして一年、それを実感している。

そう思う大きな理由は、しかし、久しぶりというところにあるのではない。かつては考えられなかったのである。「現代思想」が正面から研究の対象になること自体がである。大学院の指導教官であった経済学部の平井俊彦先生からは繰り返し言われた。「ラカン？フーコー？ドゥルーズ？そんなもの〈専門〉にならんぞ。〈現代思想〉なんて看板を上げたら、就職できないぞ」。読んで「取り入れる」のはよくても、その「取り入れる」先はあくまで社会学であったり、文学や哲学であったり、社会思想史の古典的な思想家研究であったりしなければならなかったのである。実際、戦前からの歴史をもつフランクフルト学派の研究を除けば、一九六〇年代以降に登場した思想家たちにかんする論究は、アカデミズムの外にある「批評」世界か、東大で形成されつつあった「表象」研究の枠組みに収納されるほかなかった。それを潔しとせず、また、社会主義圏の音を立てての崩壊を横目で見ながら、改めてアルチュセール（「現代思想」に分類されるマルクス主義哲学者）に向き合いたいと思っていた私は、ほとんど日本そのものを見捨てた心境であった。その私が「現代思想」をめぐる研究班の班長をしていること自体に、隔世の感がある。いったいいつの間に、この私がこの席に座ってよい学者世間となっていたのか。

そして「政治」である。一九八〇年代以降、日本ではほぼ「現代思想」の別名となってきた「ポストモダン思想」は、「政治」そのものを近代の遺物として、関心の範囲からほとんど切り捨てて来なかったろうか。リオタールが「ポストモダンの条件」としたのは、

「大きな物語の終焉」であった。その「大きな物語」が「国民国家」と「革命」による「人類解放の物語」であったことは言うを俟たない。それを「古い」と見なすことにより、「現代思想」は「政治」から、たえず「新しく」あるべき「思想」が関心を抱く根拠まで奪ってきたのではないか。「現代思想」にとって「政治」は、近代の残務整理のようなものだったはずである。だから、デリダが民主主義を語りはじめたとき、「現代思想」界隈にはかなりの違和感が漂うことになった。

つまり「現代思想」が研究主題となるという事態は、そのようやくのアカデミズム内「勝利」を示すと同時に、「現代思想」を「政治」という視点から問題にする大がかりな共同研究が成立する事実は、その「思想」としての「敗北」の印でもあるのだ。「現代思想」を生む一つの契機となった「一九六八年パリ五月革命」を取り上げたシンポジウム（研究所と研究班の共催）が五〇〇名近い人々を集め、公開にした研究会には七〇名もの参加者があり、研究会のメンバーそのものも徐々に増えていくなかで、私はそうしたアンビバレントこそを実感している。毎回の研究会とメーリングリストでの議論にも、同種の性格が充満している。私たちの多くは、これまでお互いの仕事をかなり知っている間柄であった。つまり多かれ少なかれ「現代思想」と関わりをもちながら、それぞれの領域において研究を続けてきた。しかし一同に会することはおろか、直接議論したことはほとんどなかったのである。歴史家と精神分析家と文学者が、さらに哲学者や経済学者までが「現代思想と政治」という土俵で、ようやく出会えることになった。議論しなければならない共通の問題がそこにある、と思って言葉を交わせるようになった。しかし、私たちはそれぞれ歴史家であり、精神分析家であり……、私たちの誰も「政治学者」ではない。私たちの誰にも、「政治」から「現代思想」全体を串刺しにする学問的な用意がない。近代的「政治」の固有性を否定してきたとも言える「現代思想」界に「政治学者」がいないのは当然であり、私たちはいわば「自己肯定」と同時に「自己批判」するために集まっているのである。この緊張感が、私たちの共同研究を成り立たせていると言ってよいだろう。

ようやく一年を、それもたった五回の研究会を終えたばかりである。私たちにしか語れない「現代思想」と「政治」はどこにあるのだろうか。それを語るにはまだ早すぎる。

近代古都研究班とフィールドワーク

高木博志

「近代京都研究」班（丸山宏班長、二〇〇四～二〇〇五年）をうけて、共同研究「近代古都研究」（二〇〇六～二〇一一年）に六年間、とりくんだ。

研究班では、かつて天皇がいた都である奈良・京都といった古都に加えて、金沢・仙台・熊本・岡山の旧城下町や伊勢・首里なども含む「歴史都市」へと、関心が広がっていった。都市における歴史性を考える視点は、今日、たとえば文化的景観（文化財保護法）の指定対象の広がりにもうかがえる。当初、農林水産業に関連する文化的景観、すなわち農漁村や山村の景観の指定からはじまったのが、貴族の国風文化や別業を体現する宇治や「加賀百万石」の旧城下町・金沢といった都市がその対象になってきた。変容し再構成されてゆく近代都市の歴史性に、現代の地域おこしともかかわって関心が高まっている。

研究班への参加者は毎回、二〇名をこえる規模で、歴史学・建築学・造園史・美術史・民俗学・土木学など幅広い専門家がつどったことも特色であった。そして現場に立つことを重視して、多様なフィールドワークを行った。

とりわけ毎年、夏の合宿では、旧城下町をおとづれ、その都市を研究対象とした文献を素材として、地域の研究者の土俵でともに議論した。二〇〇七年一〇月一三日の金沢では、橋本哲哉編『近代日本の地方都市―金沢／城下町から近代都市』（日本経済評論社、二〇〇六年）を取り上げて、近世から近代への移行において士族から商工業者へと市政の担い手が変化する問題、高等教育や軍隊などインフラの金沢における「誘致」の実態、真宗の近代における展開などの報告があり、真宗門徒や都市計画や伝統勢力としての士族と公家をめぐる京都と金沢との比較などが議論された。二日目には「軍都・金沢」をテーマに、偕行社、師団司令部庁舎、石川護国神社、師団長官舎、兼六園（明治紀念標）などを本康宏史さんの案内でフィールドワークをした。また二〇〇九年四月一八日には仙台市歴史民俗資料館を会場に、『仙台市史、近代一』（二〇〇八年）をめぐって、仙台市史の事務局や執筆者や宮城近代史研究会のメンバーとともに五〇名をこえる参加者をえ

て、「歴史都市論として「仙台市史」を読む」（高木博志）、「「学都」仙台を考える」（田中智子）、「自治体史の新しい段階と『仙台市史』」（原田敬一）、「旧市井二十四町共有金をめぐって」（小林丈広）といった小報告をもち、地域の研究者と議論した。翌日には佐藤雅也さんの案内で、旧陸軍墓地（常盤台霊苑）、仙台市立博物館・仙台城跡周辺の師団の遺跡、瑞宝殿などをまわった。近代の旧城下町における旧藩の顕彰と軍隊のありようが大きなテーマであった。それらは、あらためて京大人文研において、「「城下町金沢」の記憶―創出された「藩政期の景観」をめぐって―」（本康）、「軍都・軍都・杜の都と仙台―生活暦（祭りと年中行事など）と戦死者祭祀の変遷」（佐藤）といった報告をえて共同研究が豊かなものになった。

さまざまに歩いた、フィールドワークをあげておきたい。旧城下町としては、小野芳朗さん案内の水利からみた岡山（二〇〇八年）や、三沢純さん案内の熊本城下（二〇一〇年）めぐり、その他にも、第九連隊跡・三井寺西南戦争碑、秦家住宅、滋賀の文化的景観（近江八幡・大津・菅浦）、元興寺・興福寺旧境内、黒谷掃苔、名古屋城・旧中村遊廓、大阪靖国軍人墓地・大阪城、二条城、安楽寺かぼちゃ供養、江田島・呉市海事歴史科学館などと多様な場であった。フィールドワークでは、旧藩、軍隊、慰霊、都市と周縁、文化遺産の保護など、都市の歴史性に焦点があった。

私の「特殊コレクション」

――朝鮮在住日本人の回想記を読む――

水野直樹

「移民の近代史―東アジアにおける人の移動―」というテーマを掲げて共同研究を進めるなかで、植民地であった朝鮮に住んでいた日本人が戦後、日本に引き揚げたのちに書き記した回想記の存在が気になり、それらを収集しはじめた。もちろん以前から、日本と朝鮮の関係を考える上で重要な回想記や伝記を読んではいたが、政治家や官僚、実業家あるいは文学者などのものが中心であった。しかし、植民地朝鮮に住んでいた「普通」の日本人でも、引き揚げ後に自分史という形で回想記を書いている場合がかなりある。ところが、それらの本は大学の図書館はおろか、国立国会図書館、公共図書館などにも所蔵されていないケースが多いた

め、読もうとしても、どこにあるかがわからない。

そこで、朝鮮に住んでいたことのある日本人の回想記類をリストアップしながら、所蔵機関を調べるという作業をすることにした。数年前からはじめた個人的な作業なので、かならずしも網羅的ではないが、いまでは八〇〇冊ほどの文献リストになっている。本人が書いた自分史だけでなく、伝記類、追悼文集、あるいは学校の同窓会などが編纂した文集なども含まれているので、すべてが回想記と呼べるわけではない。雑誌などに掲載された回想記もたくさんあるが、リストには入れていない。

リストアップした回想記が手近なところでは見られない場合には、古書店を通じて購入することにした。これらの相当数が私家版、つまり自費出版という形で刊行されているため、図書館に所蔵されていないだけでなく、古書店にも出回らないので、実際に購入できるものは限られているが、それでも古書店の在庫データ検索が便利になったおかげでけっこうな数の回想記を入手することができる。正確な数を数えていないが、リストのうちの半分程度は実物を購入できたのではないだろうか。いまでは、私の研究室のなかの「特殊コレクション」となっている。

朝鮮在住日本人の回想記、特に戦後に書かれたものに力点を置いて集めているが、少しずつ読んでみると、これらの多くが「引き揚げ」に関する記録であることに気づく。一九四五年八月の日本の敗戦後、植民地に住んでいた日本人は引き揚げることになったが、回想記の多くは引き揚げの苦労を書いたものである。特にソ連軍が占領した北緯三八度線以北からの引き揚げ記録が多い。しかも、その多くは、八月九日のソ連軍による攻撃・侵攻が始まった時点から書き起こされている。一九四五年以前のことにはほとんど触れず、三八度線越えの「脱出行」が記録の中心になっている。

回想記のこのような傾向は、「満洲」在住日本人の場合もほぼ同じであろう。敗戦によってそれらの人びとがどれほど苦労をしたかについて記録を残し、後代に伝えることはもちろん大事なことである。しかし、ソ連軍侵攻以前に朝鮮や「満洲」に住んでいた日本人がどのような生活をしていたのか、朝鮮人や中国人との関係はどうだったのかなどについての記述を欠いた回想記は、やはり一面的なものではないだろうか。日本人の労苦や被害だけが強調される歴史の記録・記憶のされ方は、戦後の日本社会の中でかなり一般的なものになっていることを在朝日本人の回想記を読みながら感じざるを得ない。

とはいえ、これらの回想記は歴史の記録として無視

することはできないし、中には植民地に生れ育ち、そこに住みながら見たこと、感じたことを率直に記しているものも少なくない。回想記は最近も刊行が続いている。在朝日本人の最後の世代が記録を残しておきたいと考えているからであろう。私も、いましばらく「特殊コレクション」を充実させていきたいと思っている。

『江南経略』風景好

山崎　岳

現在、「東アジア地域間交渉と情報」班では岩井班長のもと『江南経略』の会読を行っている。同書は一六世紀、明代中期の中国で「倭寇」鎮圧の要請から編まれた書物である。その内容は、江南地方防衛のための各種戦略論と、現在の上海から南京東郊あたりまでの諸府州県の形勢分析である。本所目録上は子部兵家類に分類されるいわゆる兵書だが、軍事地理的な情報のみならず、この地域の社会像を探るうえで興味深い叙述がふんだんに盛り込まれている。

著者の鄭若曾は蘇州府崑山県に生まれた人物である。当時の蘇州は江南文風の一大中心で、中国のみならず東アジアにおける文化・芸術の都であった。同時代の蘇州文士の多くがそうであったように、鄭若曾も科挙の道半ばにして官途の王道を行くことは諦めざるをえなかったが、その類いまれな才知で身を立てるだけの環境には恵まれていた。国子監祭酒も務めた魏校の娘を娶り、王畿や唐順之など当代一流の名士たちと親交を結び、浙直総督胡宗憲の幕下では管下情報の収集整理に努め、参謀役としてその政策立案にも深く関わっていた。その多年にわたる研究成果が、中国における海防論の古典『籌海図編』とその姉妹編ともいうべき『江南経略』である。

人文研所蔵の『江南経略』は残存した序文の紀年にもとづいて嘉靖四五年（一五六六）刊本とされているが、班長の調べによれば内容は隆慶二年（一五六九）序刊本と同一で、応天巡撫の肝いりで隆慶年間に上梓されたものだろうとのことである。当時、「倭寇」問題は江南デルタでこそ終息するものの、いまだ決定的な解決をみたわけではなかった。「倭寇」などとは呼ばれても、この動乱は中国東南沿海部に発展しつつあった武装勢力、ないしは武装商業勢力が大きな要因だ

ったことがつとに指摘されている。同様の地盤に立つ元末の方国珍や張士誠、清初の南明・鄭氏政権などは、こうした形勢がさらに展開し、短命ながら独立政権の体裁をなしたものといえるだろう。

私事になるが、まだ学生だった二〇〇二年の夏休み、江南地方を一ヶ月一人で旅したことがある。第一の目的は当時読んでいた文献の舞台となる浙東の島々をこの足で歩いてまわることだったが、恩師の勧めで費孝通の文章などに触れていたため、ついでに江南の市鎮も見てやろうと思ったのである。好景気に沸く上海市郊外では農村部でも家屋の建て替えが進み、セメント造りの三階建て民家が立ち並んでいたが、ローカルバスを乗り継ぎながら嘉興市や湖州市の郊外を行くと、もうもうと立ちこめる霧の中は南画さながらの田園風景であった。折しも中国国内向けの観光資源として古市鎮が注目されはじめていたが、烏鎮や南潯などの観光地でも、表通りを少し外れると古ぼけた中に生活のにおいを漂わせた家並みに迷い込むことができた。巷間でとびかう方言については、即席で仕入れた上海語の知識がなければ何の感興も催さなかっただろうが、日本の漢字音と対照すると濁音や入声の対応がなかなかにゆかしく、道を尋ねた相手のとるにたりない一言がいとも風雅ないにしえの呉音のように響いたものである。食べ物は魚介が比較的豊富で、味付けは淡泊、麺類以外はすべておいしかった。路地裏で量り売りされる黄酒はややかび臭いこともあったが、それも地酒の滋味のうちであろう。旅は道連れ世は情け、湖州では台湾からの浮浪青年と連れだってまわり、浙江の桃渚では一人暮らしの安宿の主人と三日間同じ釜の飯を食い、象山ではコワモテの兄さんたちに獲れたての魚を腹いっぱいご馳走になるなど、今思えば懐かしくも気ままな一人旅であった。

歴史を書こうとする者にとって、個人的な体験や感慨というものは、かえってじゃまな場合がある。旅人にも色んなタイプがあるが、概して歴史の本質云々よりは物珍しく楽しげな現象面の刺激を求めるのが人の常だから、手前勝手な思い入れを投入することは学問的に問題がある、ということは承知しているつもりである。旅などしなくとも、江南の文人たちの雅俗兼ね備えた生きざまを文献を博捜することで活写した研究があることも筆者自身よく知っている。にもかかわらず、私は『江南経略』を読む際に、自分が見知った江南の風光をできるだけそこに重ね合わせようとしている。

鄭若曾にとって江南とは、経略の対象である以前に彼自身の故郷であった。民兵だ戦艦だ刀だ鉄砲だとい

うきな臭い話の前提には、戦乱に巻き込まれているふるさとを憂慮する心根があった。地図や箇条のもと無機的に羅列されるかに見える地名一つ一つについても、地元の人間ならではの常識や偏見、個人的な思い入れもこめられていることだろう。ただ、そういった瑣末な情報はおおむね捨象され、戦略的見地に要点を絞り込んでこの書はまとめられている。いわば生命と肉を失い、骨組みだけを残した化石である。骸骨の構造も立派な研究対象だが、私の関心は『江南経略』の時代が生きて活動していた様態にある。失われた生命が戻らないように、文献の中の過去が眼前の現実としてよみがえることはありえない。歴史を読む者にできるのは、命なき文字列を追いながらその生きた肉身を観想することである。言下に妙なる市鎮の喧噪を聞き、図上に芳しき溜め池と家畜小屋のにおいをかぎ、心中に露店市場でひまわりの種を食んでいる蘇州美人の愁眉を想うのである。

こう書けば何やら秘術めいた心霊修養のようだが、筆者個人の趣味はともあれ、班自体はこうしたいかがわしさとは無縁の、至って光明正大な読書会である。大学院の学生も積極的に参加してくれており、教育的な効用も十分ではないかと思う。所長としての激務をこなしながらこれを主催しておられる班長には本当に頭が下がる。せめて所報の原稿くらいはと引き受けた次第だが、覚えず私的感興に終始してしまった。身の不肖を呪うばかりである。

古典中国語の形態素解析器を作る

守岡知彦

この研究班の主な目的は古典中国語の形態素解析器を開発することである。「形態素」とは意味を持つ最小の単位を示す言語学の用語である。コンピューターにおける自然言語処理においては必ずしも最小の単位ではなく、外形的に決定可能な語位のニュアンスで使われることもあるが、いずれにしても『語』に相当するような基本単位を示すものとして捉えられることが多い。形態素解析器というのは文字列をこの形態素の列に分解する処理のことで、自然言語処理や全文検索技術の基盤技術として今日では日常的に使われるものとなっている。

この研究班でなぜ形態素解析器を作ろうという話に

なったかといえば、その前身にあたる研究班で、安岡班長が掲げた目標であった『（古典中国語の）白文に自動的に点を打つ』という問題について考えた結果、韻文に関してはある程度ヒューリスティックな方法が可能であるものの、一般的には語の品詞や係り受け関係が判らないと無理だという（考えてみればしごく当り前な）結論に達したからであった。そういう意味では、実をいえば、形態素解析器だけでも当初の目標を実現するには不十分なのであるが、まずは形態素解析器を作ってみようということになった。

前述のように、形態素解析器は今日ではネット上の検索サービスやパソコン・スマートフォン等の検索機能等を実現するための基盤として広く日常的に使われている基盤技術であるが、形態素解析器を実現するためには、通常、大量のタグつけされたコーパス（文を収集し、各文を形態素に区切り、各形態素に品詞や意味カテゴリー等を付与したもの）が必要となり、こうした大規模形態素コーパスの開発には大きなコストがかかるため、古典語やマイナーな言語ではその整備が遅れがちであるといえる。このことは、つまり、こうした言語ではメジャーな現代語だと当り前に使えるような機能が利用できないことを意味する訳である。そうした実利的な意味での形態素コーパスの重要性をいえば、この他にもいろいろあるが、漢字というものに関心を持ってきたものの一人として、その形態素としての側面について考えることは極めて興味深いことといえる。また、古典中国語（あるいは、漢文）という自然言語を対象に、言語学的な視点と自然言語処理的な視点、内容に関する知識と内容を無視する態度、情報学的な美意識と情報処理的な有用性といったある時には重なったりある時には相反するような異なる知を総合しないと取り扱えないような、ある意味、曖昧模糊としていて難しい対象について、実例を前にした専門領域を異なる班員間の議論を通じて少しずつその知見を広げて行くというのは人文情報学という新しい分野における共同研究の実例を示す上でも有益ではないかと思われる。

また、この班の特色のひとつとして、研究班で議論した情報や開発されたプログラムやデータが基本的にネット上で公開されていて、最新の情報にアクセスできるということがある。研究班に実際に参加していない研究者との情報交換という点ではまだ課題はあるものの、研究結果だけでなく、研究途上のデータや研究のための資料やツールの公開の重要性を鑑みれば、こうした試みを拡充していくことも大事なことだといえると思われる。

研究の場

クリスティアン・ウィッテルン

北白川の分館から石を投げて届く距離にすんでいる友人が、分館の建物は教会だと、以前からずっと思っていた。「奇妙な教会だとおもうよ。出入する人も少ない。日曜日で門の扉は閉まっており」と彼が言う。なるほど。私も一番最初に分館に来た時、この建物はスペイン南部の教会によく似ていると思っていた。たとえばグラナダにあるイグレシア・サン・サルバドレ、あるいはアルハンブラに多くの類似点があると思ったことがある。後になって聞たが、武田五一先生の設計の背景に確かに南スペインの修道院のイメージがあったの様だ。しかし、アンダルシア地方にはイスラム王朝時代からの建造物や庭などが多く残っているので、ヨーロッパの他の所である、純粋なキリスト教の修道院ではなく、既に二つの多きな文化圏の影響を継承している。この様にヨーロッパの西端からアジアの極東に来たにはどんな意味があるのでしょうか？

周知の通り、古代ギリシャやローマの学問と知識は中世ヨーロッパに失った部分が有った、そこでイスラム王朝時代のスペインは中世ヨーロッパ文化圏の全体にそこで保護された学問を再び提供する、さらにインドなどで得た新しい知識を伝えることで重要な役割を果たした。北白川分館の全身である東方文化学院京都研究所にも同じ様な役割を期待されたでしょうか？

学問と修道の共通点はその当時どう考えていたのだろうか？　私は以前ヴェネツィアの島サン・ジョルジョ・マッジョーレにある修道院に開催された学会に呼ばれたことがあるが、その時に修道院の歩廊両側にある独居室が宿にもなったいた、「隠遁生活は学問に相応しいなー」とおもっていた。おそらく分館の設計者もそのつもりで研究室を独居室のようにつくれただろ。それはともかく、分館で研究生活はじめた時から、館内には不思議なことに時の流れは外の世界と違うペースで進んでいると感じた。まだ朝に出勤したばかりの時点でもすぐに昼になってしまい、間もないところで日が暮れる、本来計画したことの半分も出来ていない内にも帰宅してしまう。

分館の耐震改修に伴うしばらくの間本部構内の文学部東館に仮住まいする運びになった。この建物の西側は北白川分館の建物より数年後に第一期工事の鉄筋コンクリート三階建て完成したが、それ以外の部分は昭

和四〇年に完成された。下見にいった印象は、ものごとをゆっくりと考えるよりも、大勢の学生を対象に知識の生産する場所だった。この建物に時間の流れはどうなっているだろうか？　住んで見ないと分からないが、世の中のリズムに分館より近いだろうとおもう。

この頃共同研究のために東京への出張が増えている。一九世紀のドイツではいまの文献学のルーツがどんなように形成されたか、伝達されたテキストはどんなように編集すべき、どんな形で出版されるべきかというような問題について、当時の最先端の手法はどんな用に形成されたかなどの問題についての考察である。しかし、各方面からの参加者にお越しやすい場所としてJR東京駅日本橋側にある、平成二〇年に完成した三五階建てのオフィスビルに設置された大学のサテライトに研究会の会合が行う。ここは主に社会人学生向けの講座、或いは大学の説明会など、知識をサービスとして提供する為の場として活用されるのようだ。然し、こんな感覚的には二二世紀にある場所から一九世紀の心境はかなり遠いなと実感している。ここの研究会を参加するには経費削減などを理由に日帰りで行くことが多い。そうすると朝早く新幹線に乗って、ランチタイムに打ち合わせを兼ねて食事をとって、三、四時間の研究会後に懇親会にも参加して、終電間際に帰るという形になりがち。その結果は、一日の出かけの時間の早さ、私の感覚では分館の時間の流れは大雨後の河の激流のように数倍にも上るので、なかなか就いていけない。回復には二、三日ぐらいがかかる事が多い。

中世ヨーロッパの暗黒時代在中に古代の知識や学問がイスラム王朝に保護された様に、改修後の北白川分館も東方学研究拠点として、効率向上と計算可能な成果を重視する現在学術世界の暗黒時代中に無視された中国古典の価値観に基づく研究が、時間的にもゆとりができる形で続ける場として、後の世代に貢献できればと期待している。

グローバリストのいやしさ

矢木　毅

学生のころはやたらと長大な小説を次々と読破していた。教養部図書館の二階の閑散とした閲覧室は、田舎から京入りしてきたばかりのころの私のお気に入りの場所のひとつであったのだ。それからかれこれ十八

年は京都でぐずぐずし、宮崎に行ったかと思うとまた京都に舞い戻って、相変わらずぐずぐずしているが、今は職業としての「研究」に追われて読書の楽しみもない。もちろん、漢文史料を読むことは私にとっては「飯の種」であると同時に純粋な「楽しみ」でもあるのだが、それは学生のころの無心な読書とはやはりどこか違う。

そうした心の隙間をうめるために、たまには小説やらエッセイやらにも手を伸ばしたくなるのだが、そうそう時間を割くわけにもいかないので、まずは「はずれ」のない、定評のある短編小説に目を向ける次第となる。モーパッサン（一八五〇～九三年）は、学生のころからなんとなく敬遠してきた作家の一人で、……というのは文庫本のジャケットに印象派ふうの裸婦像が描かれていたりするのが気恥ずかしかったという、なんともうぶな理由だったのだが、今や汚れきった中年の私は、なんの恥じらいもなく彼の出世作『脂肪のかたまり』（一八八〇年）を手にすることができた。もちろん訳本である。

あらすじについては特に紹介するまでもない。普仏戦争（一八七〇～七一年）の最中、プロシャ軍に占領されたルーアン（パリ西北方の都市）から、町の名士たちを乗せた乗合馬車がルアーブル（さらに西方の港町）へと向かう。なかには共和主義者のコルニュデという男や、「脂肪のかたまり」というあだ名の、ちょっと男好きのする売笑婦なども乗り合わせているのだが、この「脂肪のかたまり」の純粋な「愛国心」が原因となって乗合馬車が足止めを食らい、名士たちが寄ってたかって彼女にいやみを言う。足止めというのは、つまりプロシャ軍の士官が彼女を……、いや、万が一まだお読みになっていない方がおられるといけないので、このことはやはり書かないでおいたほうがよいだろう。

結局、彼女の「愛国心」を踏みにじって乗合馬車は再出発するが、「誇り」を踏みにじられた彼女のすすり泣きと、それを強要した名士たちの気まずい沈黙のなか、コルニュデひとりはなにか面白いいたずらでも思いついたように、あてつけがましく愛国歌（ラ・マルセイエーズ）のメロディーを口笛で吹き続けていた……。

プロシャ軍の占領するルーアンからルアーブルに逃れ、あわよくば対岸のイギリスに渡ろうとする乗合馬車の名士たちは、いまどきの言葉でいえば、ご立派なグローバリストたち、ということになるのだろう。商売の元手さえあれば、彼らはどこででも生きていける。国の支配者がだれに代わろうと、それ自体はたいして

問題ではないのだ。

一方、乗合馬車に乗るお金の工面すらできないような人々は、結局、生まれ育った土地や社会にしがみついて生きていくしかない。そうした人々からみれば、グローバリストたちの掲げる口先だけの「愛国心」には強者の傲慢なエゴイズムが芬芬として、そのいやしさには耐えることができないだろう。

この種の愛国的なナショナリズムは、とかく身の丈にあった小さな巣穴にこもりがちの私にとっては甚だ居心地のよい子守唄となる。しかし、あてつけがましく口笛を吹くコルニュデにしても、所詮は「戦場」からとっとと離脱した変わり身の早いエゴイストにすぎないのであって、それはおそらくは私の、また大多数の読者の自画像ともなるものであろう。

モーパッサンの時代のトレンドであったナショナリズムは、今やぐるりと一回りして、新たにグローバリズムとの対抗のなかで高揚しつつあるようだ。政治・経済におけるグローバリズムの高まりとともに、そのいやしさを語る言説もまた活発になってきている。グローバリズムというと聞こえはよいが、要するにそれはどこかの国の他人のナショナリズム、自分たちにとっては圧倒的に不利なかたちの他人のナショナリズムを押し付けられるだけのことなのではないか……。世間一般の人々と同様、私もまたこの二つのトレンドのなかで揺れ動き、戸惑っている群衆のなかの一人なのだ。

しかし、「多元統合人文学」――文学部に設けられた研究所の協力講座が、たしかそんなふうな名称なのだ――を謳う研究所の一員でもある私は、多少気乗りのしないところはあっても、やはり自分の小さな巣穴を打ち壊して、より広い世界へと出ていかなければならない。グローバリストのいやしさが語られるとすれば、その批判にも耐えうる新たな世界像を提示することこそが私たちの研究所のそもそもの設置目的なのだから……。

それにしても、四十三歳の誕生日の一ヶ月前に狂い死にしたこの男は、私よりずっと若い時期にこの傑作を書き、またはるかに多忙多作であったわけだ。このごろは段々と自分より若い人の文章を読むことのほうが多くなってきたな。……そんな諦めとも焦りともつかない思いが兎角まとわりついてくることも、いわゆる中年男の悲しいさがの一つとなるのだろう。

（『脂肪のかたまり』モーパッサン作、高山鉄男訳、岩波文庫）

第一次世界大戦と二つの日本漫画

高階　絵里加

大正三年（一九一四）八月四日、『東京朝日新聞』紙上において、岡本一平の「外電漫画」の連載が始まった（第一回のみ「電報ポンチ」）。のちには歌人で小説家の岡本かの子の夫、そして画家岡本太郎の父としても知られることになる一平はこの時二八歳、明治四三年に東京美術学校の西洋画科を卒業後、大正元年に東京朝日新聞社に正式に入社し、政治諷刺画や社会風俗の小スケッチに短文を添えた「漫画漫文」と呼ばれる独特のスタイルで人気を集めだしていた、新進の漫画家であった。

「外電漫画」は欧州で勃発した第一次大戦に題材をとる一日一コマ（ときに二コマ）の戯画であり、八月二九日まで連載され、八月二六日からは「戦争漫画」（うち一回のみ「少年戦争漫画」）として掲載が継続した。当時の『東京朝日新聞』には、パリ在住の洋画家正宗得三郎のスケッチなど、戦争関連のイラストも時おりは載っていたが、一平の漫画は三ヵ月以上の長期にわたり、ほぼ途切れなく連載されたものだ。

「外電漫画」と「戦争漫画」は、世紀末ドイツの美術雑誌『ユーゲント』や『ジンプリチシムス』のイラストを思わせる白黒のコントラストを生かした絵柄に、夏目漱石も称賛した辛みのきいた短文がついている。血なまぐさい前線の情報や不穏な政治情勢のニュースが連日紙面を埋めるなか、簡略で機知に富む一平のコーナーは、まっさきに読者の眼に入ったと思われる。この漫画だけを見て、最新の戦況の一端を頭に入れた忙しい読者も多かったに違いない。連載中一平は新聞社に毎日待機して、夕方五時二〇分以降に社に送られたすべての電報が集められると、すぐさま画材を選び趣向を作り説明文まで考案し、少なくとも一時間半後には仕上げて調版師の手元まで送らねばならなかった。これで翌日の朝刊に間に合うのである。

九月二五日から十月一日には、「戦争漫画」に「こども戦争影画（かげえ）」が七回分挿入された。「独逸兵釣り」「長過ぎるサアベル」といった話を毎回三〜四コマの影絵であらわすもので、第一回の影絵のところに「（切抜いて映してご覧なさい）」と但し書きがついているので、新聞を切り抜いて「戦争影画（かげ

え）」で遊んだ子供も多かったことだろう。親しみやすい一平のスタイルは、遠い国々で進行中の惨禍について、少年や子供たちにまで関心を抱かせるきっかけになったのかもしれない。

あるときは当時フランス在住だった島崎藤村の連載「仏蘭西だより」の記事の隣に掲載されることもあった「戦争漫画」は、十一月上旬まで続いた。十一月後半には、「外電漫画」「戦争漫画」「こども戦争影画」に、八月三日に『東京朝日』に掲載された「欧州座の大芝居」の口絵を加えて一冊にまとめたものが、書籍『戦争漫画　陥落』と題して出版された（磯部甲陽堂、菊版栽、約二百頁、定価三三銭）。本の巻頭には、コロタイプ版の「青島陥落記念」の別刷二点が新たに加えられている。

『戦争漫画　陥落』の評判は、「…中は例の氏独特の絵画に加ふるに、犀利な文章で、説明をしてあるので、一読してどうしても笑はずには居られぬ。装丁もこの書の内容にしっくり合ったもので、戦争の記念としても一本を備へる必要があると思ふ」（『美術週報』第二号第九巻）と悪くなかったようだ。

ちなみにこの本は、国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」でも公開されている。

一平の新聞連載ほど広く一般に知られることはなかったが、第一次大戦への同時代の反応として見逃せないものに、建築家・建築学者伊東忠太の葉書絵漫画がある。帝国大学工科大学で建築を学んだ伊東は一平のようなプロの絵描きではないが、生来芸術に趣味の深い母を持ったこともあり、幼いころから絵が好きだった。美術家になろうと志したこともあったほどで、残された旅のスケッチやフィールドノートにみられるように、建物ばかりでなく風景や人物像にも素人の手すさびという以上の才能をみせている。

第一次大戦の勃発時にはまだ外国体験のなかった一平とは異なり、伊東はすでに明治三五年から三年間をかけて、中国・インド・西アジア・トルコ・欧米を巡歴していた。それだけに、大正三年八月以来、欧州・アメリカ・アジアを巻き込んだ大戦のなりゆきは、伊東に日々さまざまな抑えがたい感興を呼び起こした。これを彩管に託し、結局戦争終結まで一年に約百枚、計五百枚の葉書大の戯画を描いたのである。現在、インターネット上の「社団法人　日本建築学会　建築博物館　デジタルアーカイブス」の「伊東忠太資料」の中の「葉書絵」では、大正三～八年に描かれた第一次大戦関連の五百枚すべてを見ることができる。厳密にいうとすべてが大戦関係というわけではなく、日本の政治・社会・経済・災害やスポーツ（相撲）、また戦

争以外の欧米諸国のニュースも扱われているが、画題の中心は圧倒的に第一次大戦といってよい。

母がよく膝に乗せて見せてくれたという草紙錦絵、また子供のころから暇さえあれば読んでいた八犬伝・弓張月・水滸伝などの挿絵、さらには地獄絵や餓鬼草子、鳥羽絵、北斎や暁斎の戯画を連想させる伊東の葉書絵では、交戦各国、飛行機や戦艦は動物や人、河童、鬼、龍や怪鳥などで表されて、歌舞伎風の立ち回りを演じている。桃太郎が登場する事もある。勝利の女神は翼をつけ棕櫚の葉と月桂冠を持つ西洋風、いっぽう平和の女神は東洋の観音像風である。例えば「ランス寺院破壊」では、ランス大聖堂の前を逃げ飛ぶ天女たちのあとを、鉈や鎌や槍を振りあげた鬼のような怪物たちが追いかける。また、「独飛行機巴里のノートルダムを脅す」では、ノートルダム大聖堂のガーゴイル（怪物をかたどった彫刻の雨どい）たちが、青鬼をのせた赤い飛竜（?）が空から舞い降りてくるのに驚きあわてている。その自由な空想力と創造力は、「若し歴史上又は社会生活の上から化物といふものを取去つたならば、極めて乾燥無味のものとなる…確かに化物は社会生活の上に最も欠くべからざる要素の一つである」（「化物研究」『日本美術』第十七巻第六号）、「化け物に…興味を有たぬ人は余程の変り者である」（「化けもの」『伊東忠太建築文献　論叢・随想・漫筆』龍吟社　昭和一二年）、と述べ古今東西の空想的な異形の形象を論じた建築学者の面目躍如たるものがある。

これらの戯画葉書絵は純粋に個人の趣味による余技としての制作であり、伊東自身は私蔵するつもりで世に出す意図は全くなかったが、人の目にとまり展覧を勧められたのか、少なくとも最初の百枚は当時美術展などの会場になっていた三越旧館で展示され好評を博した。ある評によれば、その面白味は題材をすべて東洋趣味で扱った所にあり、ことに博士独特の怪物において光彩を発揮しており、絵葉書としても面白く、今回の戦のいい記念であるという。

さらには、たまたま葉書絵を目にした友人に熱心に出版を勧められ、その友人が東京朝日新聞の杉村楚人冠（東京朝日新聞社の記者で言論界にも影響力のあった杉村廣太郎）に編集事業を託し、結局五百枚が完成した所で、『阿修羅帖』第一巻～第五巻（国粋出版社　大正九～十年）として刊行された（京都大学吉田建築図書館には第一巻と第二巻が所蔵されている）。

実は、日本建築学会のデジタルアーカイブスで見ることのできるオリジナルの絵はがきと『阿修羅帖』とは同じではない。絵葉書裏面すなわち伊東忠太による絵の描いてある方はオリジナルと『阿修羅帖』とは同

じだが、表（おもて）面つまり住所を書く側が異なっている。オリジナルであるアーカイブスの方の表（おもて）面は、伊東がたとえば「今日、日独国交破れ、日本独乙に向て宣戦す、独、我が最後通牒に対して回答を与へざればなり」といったような文章を書き入れている場合に限りデジタルで公開している。いっぽう、『阿修羅帖』は、一頁ごとに葉書の絵の面とそれと同じ大きさの葉書大の枠が上下に並んでいるが、この枠内にはもともとの伊東の文章（オリジナルはがきの表の面）ではなく、当時のさまざまな著名人の直筆あるいは活字の印刷による短文が添えられている。

なぜこのような事になったのか。第一巻の序文で、この書の編集を引き受けた杉村楚人冠の語る所によれば、公刊にあたり国粋出版社が絵葉書一つ一つに詳しい説明をつけてはいかがかと相談してきた。これに対して楚人冠は、絵というものは一目見て感心すべきもので説明を聞いて初めてなるほどと合点するようなものではないから説明などいらないといったんは断った。が、国粋出版社の主人は再度訪れ、説明が要らないのはわかったが、せめて賛をつけてはどうかという。楚人冠はこれにも、賛とは絵の足りないところを補うために入れるべきもので、この上蛇足はいらないと応じ、主人は感心して再び去ったが次の日また訪れて曰く、賛をあなた一人にまかせるのではなく、これを広く天下の諸名士に求めるのはどうか。楚人冠はこれにも賛成しなかったが、主人は今度ばかりは頑として去らず、楚人冠もついに根負けした。このようないきさつから、本として刊行する際に、絵の一枚一枚に各界名士の賛がつけられることになったのである。

もちろんかなり多くの賛は楚人冠が書き、伊東忠太も改めて複数の葉書絵に賛を寄せているが、そのほかにも平田東助（伊東の叔父）、志賀重昂、塚本靖、若槻礼次郎、与謝野晶子、島崎春樹（藤村）、柳田國男、芳賀矢一、佐々木信綱、有島生馬、有島武郎、金子堅太郎、大倉喜八郎、正親町季董、徳川頼倫、尾崎行雄、芥川龍之介、菊地寛、昇直隆（曙夢）、姉崎正治、渋沢栄一、鈴木三重吉、長谷川如是閑、嘉納治五郎、徳富猪一郎（蘇峰）、徳川家達（静岳）、丘浅次郎、南方熊楠、岡本一平、戸川安宅（残花）、斉藤茂吉、山川均、江原素六、西條隆英（孤舟）、吉井勇、山川菊栄、内村鑑三、平塚明子（雷鳥）、森律子といった各界の著名人が名を連ねている。外国人も多く（特に第四巻）、アルフレッド・ハームズワース・ノースクリフ、ブース・ターキントン、シドニー・ウェッブ、カニンガム・グリーン、トマス・ライリー・マーシャル、ポアンカレ、メーテルリンク、エミール・ヴァンデルヴ

エルド、アルトゥーロ・フェラーリン、ヴィットーリオ・エマヌエーレ・オルランドなど、英・米・仏・白・伊の政治家、外交官、ジャーナリスト、パイロット、学者、文学者らが直筆のメッセージを寄せており、東京朝日新聞社と楚人冠の幅広い人脈がうかがい知れる。

当初楚人冠は乗り気でなかったとはいえ、この国粋出版社主人のアイディアは今見ると興味深い効果をあげている。賛の書き方は各人自由であり、直筆のものは筆跡や印がそれぞれ特徴あって変化に富む。そのごく一部を紹介すれば、「獨帝窮す」はカイゼルの家の戸口に弾丸屋、パン屋、薪炭屋など大勢の商人が押し掛けている図。賛は与謝野寛「黄金を失へるより哀れなり　世界を得んとしたるあきびと」。「独の潜航艇北海に英艦三隻を撃沈す」は、水中で河童が三人の人間の足をつかんでいる。石川千代松の賛はローマ字で「Kore koso hontoni Kappa no He! He! He! Hee!」。「露軍獨境に躍進す」は、四天王像のような筋骨隆々たるロシアが刀を構えている図。島木赤彦の賛は「天の原　風定らず　夕立の　雲よりはやく　雨ふり来る」。「土人アルメニア人を虐殺す」の賛は堺利彦「人、虎を殺せば之を狩猟と云ひ、虎、人を殺せば之を兇暴と云ふ。――Bernard Shaw」。渡辺千冬は「仏軍攻勢」の賛だからなのかフランス語、時代の流行か土岐善麿や田中館愛橘、先の石川千代松などローマ字で賛を寄せている人も多い。

大戦当時大量に出回っていた戦争戯画を見慣れていたはずの欧米の人々も、伊東忠太の東洋風寓意漫画（«war cartoons»）に感じ入り、賛の中で「非常にオリジナルだ」「戦争の恐怖を表現している」「卓越した芸術家」などと述べているのは、単なる社交儀礼とも思われず面白い。

第一次大戦に対する同時代の人々の反応についての研究は多々あると思うが、『阿修羅帖』全五巻をつぶさに読み解けば、伊東忠太の大戦観に加えて、当時この戦争に対して日本と欧米の知識人が何を感じていたかについて、多少の手がかりを加えることができるかもしれない。ちなみに伊東は、第二次大戦時にも同様の時局漫画を描いている。

当時の日本の新聞雑誌ではドイツや英国の戦争諷刺漫画が頻繁に紹介されるいっぽう、外国と比べ日本では真に頭と腕のある諷刺画家がいないとの意見も記事にみえるが、今後いろいろと探索してゆけば、岡本一平と伊東忠太の漫画以外にもこのような資料が見つかるのではないだろうか。

参考文献：
清水勲・湯本豪一『漫画と小説のはざまで―現代漫画の父・岡本一平―』文芸春秋　1994
岸田日出刀『建築学者伊東忠太』乾元社　1945

てったい

富永茂樹

撤退ではない。手伝いのことを、京都（それとも関西？）ではてったいという。

一九八〇年代の半ば、私が研究所に採用されてまもない頃であったが、一一月の開所記念の講演会のあとのレセプションで、名誉教授の林屋辰三郎先生が来賓の挨拶で、「研究所を辞めてからの私はなにをしているかというと『てったい』をしてますのや」ということを語られた。当時先生は国立京都博物館の館長をしておいでだった。その数年前、パリから戻って大学院に復学していた頃に、ギメ美術館にある東洋の美術品を京都に招いて展示をするという企画があり、展覧会の準備のために嘱託として採用されて、林屋先生とも親しくさせてもらった者にとってはとりわけこの言葉がたいへん印象深く今でも記憶に残っている（だれか適当な者を紹介するよう林屋先生から依頼されたのが飛鳥井雅道先生であったのも懐かしい）。

一昨年から京都市の文化芸術担当局長の平竹耕三氏の発案で「京都市文化政策史講座」と題する講演シリーズが京都芸術センターでつづいていた。上田正昭、森口邦彦といった錚々たる方がたが高山市長以来六〇年にわたる京都市の文化行政の流れを語るという企画（上田先生とは先生が同和問題委員会の委員長をされていたときにおつきあいさせてもらった。つまりこれも学内ではあるけれど「所のそと」での出会い）。この政策史講座の最終回に八〇年代以降の文化行政について喋るようにたのまれた。

私は元総長の奥田東先生が東方部の日比野丈夫先生などとともに七〇年代末に組織された「文化行政研究会」の「提言」の作成に加わり、これは市内に五つある地域文化会館の元になった（まだ定職に就く以前、紫竹の小さなアパートの一室で、この春退官した横山俊夫氏とふたりで文章を書いたなぁ）。九〇年代には河野健二先生の許で「芸術文化振興計画」の策定、先生の死後も計画にもとづく芸術センターの開設の手伝

いをしている。そういうことを話題にするようにというのが主旨であった。もっとも私自身の「てったい」は林屋、上田、河野の各先生のそれにとても及ぶものではない。てったいのてったいにすぎない。それにそのときの苦労話を、あるいはまちがって自慢話と受け止められかねないことを披露しても喜んで聞いてもらえるはずがない。

そこで依頼されたテーマを離れて、私自身ではなく人文科学研究所、さらには京都大学がその「そと」でどんな「てったい」をしてきたか、その流れを振りかえることにした。こんなことを考えたのには、もうひとつ別の事情があった。政策史講座とほぼ並行して、加藤秀俊先生が中京大学を退職される機会に雑誌『アリーナ』で特集を組むので、永く助手として勤めておられた人文科学研究所での先生の活動について文章を書くようにという依頼も受けていた。歴史家の訓練を受けたことのない私には、どうすればよいのかわからなかったが、まずはともかく『人文学報』の彙報などにあたり（個人では閲覧できない人事記録については、総務掛の瀬尾さんのお世話になった）、研究班での先生の報告や研究業績を調査する仕事をつづけていたのだ。

加藤先生といえば、ジャーナリスムをはじめとする「そと」での仕事につい目が向いてしまう。ところが調査の結果わかったのは、先生は研究所の仕事もけっして怠ることはなく、それどころか研究所にかなりの貢献をしておられたことであった（助手の経験がないので、正確な比較のしようがないが、どんな種類の仕事にしても私をはるかに超えている！）。ほぼ同じ時期に、桑原武夫先生、梅棹忠夫先生などがおいでになり、こうした先生がたも研究所での仕事を充分以上にこなすとともに、「そと」でも活躍し、そこにはさらに京都市の文化行政へのかかわりもふくまれていた。これは研究所がたいへんにぎやかで活気にあふれていた時期とも一致している。

たとえば、一九六六年には「日本文化の総合研究機構」の提案がなされているが、以前に私が入手した資料を見ると、これには林屋、梅棹、加藤の各先生がかかわっておられたことがわかる。たんなる研究所ではなくして、資料センターそして伝統芸能を上演する劇場までも提案する大がかりな構想は、しかし翌年に当時の井上清一市長が急死したこともありいったん姿を消すが、七〇年代末になり、桑原先生が中心になって「世界文化自由都市宣言」がなされ、その具体的施策のひとつとして復活し、やがてその一部は国際日本文化研究センターの開設につながることとなる。

こうした先生がたがどれほど「てったい」を自覚しておいでであったかはわからないが、かなり永いあいだにわたって所の内部と外部が密接に出会い交流する機会が存在していたのだ。研究所が培った知を広く学外に向けて発信する。その効果がいかほどのものであったか、少なくとも過信し誇示するつもりはない。しかし他方で外部の世界に接触することで多くの刺激を受け、それが学問の展開に多少とも影響したのはたしかであろう。そんな関係は学問のありかたが、また大学の制度が大きく変化した現在、「うち・そと」のあいだの頻繁な、とはいえごく単純な往復を強いられているにすぎない私自身の自戒もふくめていうのだが、残念ながらもはや消滅してしまった。

書いたもの一覧　二〇一一年四月～二〇一二年三月（氏名五十音順　◉は単行本）

浅原達郎

容成氏の配列　曰古　一七号　四月
用曰の配列　曰古　一七号　四月
凡物流形試釈三則　曰古　一八号　一月
成王既邦の配列（劉欣寧と連名）　曰古　一九号　三月
言游（八一山人）　曰古　一九号　三月

池田　巧

現代中国語のカタカナ発音表記法、あるいは文化的雪かきについて　東方　三六四　六月

石井美保

伝統宗教、呪術と現代社会――ガーナ南部の精霊祭祀とオコンフォたち　高根務・山田肖子編『ガーナを知るための47章』　明石書店　八月
呪術的世界の構成――自己制作、偶発性、アクチュアリティ　春日直樹編『現実批判の人類学――新世代のエスノグラフィへ』、　世界思想社　十一月
虚焦点としての真正性――ガーナの神霊祭祀におけるディアスポラ司祭とガーナ人司祭との交渉を通して　田中雅一・小池郁子編『コンタウトゾーンの人文学――Religious Practices/宗教実践――』第Ⅲ巻、　晃洋書房　三月

石川禎浩

コミンテルンとアジア（共著）　山室信一等編『新秩序の模索　一九三〇年代』　岩波書店　五月
深受日本社会主義学説研究影響／中共建党為何在先？　北京晩報　五月二七日
中共一大会場被搜查之謎　『中共〝一大〟研究論文集（一九八〇―二〇一〇）』　上海辞書出版社　八月
由考証学走向史料学――従中共〝一大〟幾份資料談起　中国浦東幹部学院学報　第五期　九月
新河県的中国共産党及其歴史――以新河県的両名〝革命烈士〟為中心　森時彦編・袁広泉訳『二十世紀的中国社会』　社会科学文献出版社　十二月
The "Sleeping Lion" and Liang Ch'i-ch'ao: An Image of "Frankenstein's Monster" in China, *Acta Asiatica* 102　二月
著者コメント　現代中国研究　三〇号　三月

稲葉穣

Arab Soldiers in China at the Time of the An-Shi Rebellion, *Memoirs of the Research Department of the*

Toyo Bunko, 68　四月
パネル報告　モンゴル時代以前の西トルキスタン――ソグディアナからガンダーラまで　内陸アジア史研究　二六号　五月
前近代史のなかのコンタクト・ゾーン　コンタクト・ゾーン　四号　二〇一一年二月

岩井茂樹

◉中国近代財政史研究（付勇訳　范金民審校）　社会科学文献出版社　九月
元代行政訴訟与審判文书――以《元典章》附钞案牍〝都省通例〟为材料　『中国古代法律文献研究』　第五輯　十一月
The Death Penalty and Legal Culture in Early Modern China. Itaru TOMIYA (ed.), *Capital Punishment in East Asia*, Kyoto University Press　二月

岩城卓二

畿内の幕末社会　明治維新史学会編『講座明治維新2　幕末政治と社会変動』　有志舎　五月
書評　和泉市史編さん委員会編『松尾谷の歴史と松尾寺』　LInk【地域・大学・文化】三号　八月
近世の「生存」――人口動態を中心に――　日本史研究五九　四号　二月

ウィッテルン・クリスティアン

◉*Mazu Daoyi und Dazhu Huihai : Grundlegende Reden und Aufzeichnungen der Hongzhou-Schule des Chan-Buddhismus*. Übersetzt und herausgegeben von Christian Wittern. Berlin, Verlag der Weltreligionen im Insel Verlag　四月
The role of the Tripitaka Koreana as a model of the Digital Tripitaka, in: *International Symposium in Commemoration of Millenial Anniversary of the Tripitaka Koreana*. Millenial Tripitaka Koreana, Communicate with the World, Gwangjon (Korea)　九月
Some preliminary Remarks to a Study of Rhetorical Devices in Chàn yǔlù 禪語錄 Encounter dialogues, in: Christoph Anderl (ed.) *Zen Buddhist Rhetoric in China, Korea, and Japan*, Leiden, Boston and Tokyo　十一月
TEI テキスト・モデルの今昔　『情報の構造とメタデータ』　京都大学人文科学研究所　二月

王寺賢太

Raynal, Necker et la Compagnie des Indes: Quelques aspects inconnus de la genèse et de l'évolution de *l'Histoire des deux Indes*. Gilles Bancarel (éd.) *Raynal et ses réseaux*, Champion.　十月
◉脱原発「異論」（市田良彦・小泉義之・絓秀実・長原豊との

共著）　作品社　十一月
震災、原発、右往左往　市田良彦ほか共著『脱原発「異論」』
作品社　十一月
なぜ「異論」なのか　金森修氏の応答に応える
週刊読書人　二月二四日号

大浦康介

◉共同研究――ポルノグラフィー（編著）　平凡社　四月
虚構の知恵・「ウソ」の効用　世界思想　三八号
世界思想社　四月
◉誘惑論・実践篇
晃洋書房　九月

岡田暁生

音楽と政治参加―パウル・ベッカーと第一次大戦　筒井清忠
編『政治的リーダーと文化』　千倉書房　六月
芸術はなおも『頑張る物語』を語り得るか　『季刊アルテス
1号　3.11と音楽』　十二月
◉『楽都ウィーンの光と影』　小学館　一月

岡村秀典

中国のはじまり―夏殷周三代の洛陽　氣賀澤保規編『洛陽学
国際シンポジウム報告論文集』
明治大学東洋史資料叢刊八　三月
古鏡研究と収蔵家たち　人文　五八号　六月
後漢鏡銘の研究　東方学報　八六冊　八月
東アジア情勢と古墳文化　広瀬和雄・和田晴吾編『講座日本
考古学7古墳時代（上）』　青木書店　十二月
◉科研費成果報告書『中国初期仏教寺院とその源流にかんする
考古学的研究』　三月
北魏方山永固陵研究（共著）　日本東方学　二輯　三月

小野寺史郎

書評　川島真『近代国家への模索一八九五―一九二五』
中国研究月報　六五巻五号　五月
書評　田中比呂志『近代中国の政治統合と地域社会――立
憲・地方自治・地域エリート』　東洋史研究　七〇巻一号
六月
翻訳　孔祥吉・村田雄二郎「戊戌新政期における光緒帝の対
日政策」　孔祥吉・村田雄二郎『清末中国と日本――宮
廷・変法・革命』　研文出版　八月
一九二〇年代の世界と中国の国家主義　村田雄二郎編『リベ
ラリズムの中国』　有志舎　九月
大清臣民与民国国民之間？――以新政時期万寿聖節為中心的
探討
華東師範大学学報（哲学社会科学版）
四三巻五期　九月

梶原三恵子

カリフォルニア州教科書の古代インド史記述をめぐる論争と
訴訟―二十一世紀初頭アメリカにおけるヒンドゥー至上主
義の一断面　現代インド研究　二号　一月

菊　地　暁

ブッディスト・アンソロポロジスト赤松智城　近代仏教　一八号　五月

『じいちゃんさま』の家―梅佳代の〈批評的〉民間信仰映像―　岩谷彩子他編『映像にやどる宗教、宗教をうつす映像』　せりか書房　六月

瀝青会座談会：民家90年、変わるもの変わらぬもの　住む　三八号（他五名と共著）　六月

にひなめ研究会と植民地人類学の遺産　国際常民文化研究機構年報　二号　八月

海女に魅せられた男たち　週刊現代　五三巻三八号　十月一九日

コメント：発生的景観と統制的景観　日本民俗学　二六八号　十一月

信頼関係が生んだ貴重な写真の数々　週刊現代　五三巻四七号　十二月十日

ミンゾクガクシャとしての新村出―あるいは、京都で読む民俗学史／人類学史―　民博通信　一三五号　十二月

近代の肖像　危機を拓く　赤松智城（1～3）　中外日報　二七六六六～二七六七〇号　一月二六日～二月四日

連載再開にあたって―あるいは、方法としての京都　慶應義塾大学出版会ＨＰ　三月

◉今和次郎「日本の民家」再訪　平凡社（他六名と共著）　三月

〈ことばの聖〉二人―新村出と柳田国男―　横山俊夫編『ことばの力』　京都大学学術出版会　三月

多賀城市八幡地区　東北大学東北アジア研究センター編・発行『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2011報告集』　三月

金　志　玹

「道教授經儀式的形成與「師」觀念的發展」研究簡介　道教文化研究中心通訊　第二三期　香港中文大學　十月

元始大洞玉經　麥谷邦夫編『『道藏輯要』と明清時代の宗教文化』（平成二〇―二三年度科學研究費補助金基盤研究（A）「『道藏輯要』と明清時代の宗教文化」研究成果報告書　三月

金　文　京

◉元刊雑劇の研究（二）―貶夜郎、介子推（共著）　汲古書院　五月

『玉燭寶典』所載『法沒盡經』に見える老子・孔子・項橐三聖派遣説　東方宗教　一一七号　五月

言語資源としての漢字・漢文　文学　一二巻三号　五・六月

試論「董解元西廂記諸宮調」之語言藝術風格　国際漢學研究通訊　三号　六月

◉三国志の世界　成均館大学校出版部　八月

福澤諭吉の漢詩　十二「幼時の回想と望郷の念」

福澤手帳　一五〇号　九月
韓日の漢文訓読（釈読）と漢訳仏典およびその言語観と世界観　人文科學　九四号　延世大学　九月
中巖円月の中国体験—科挙との関係を中心として　文学　一二巻五号　九・十月
◉能と京劇—日中比較演劇論　高等研選書二五　国際高等研究所　十月
日韓漢字・漢文教育の比較　漢字漢文教育　五三号　十一月
明代『三国志演義』テキストの特徴——中国国家図書館蔵二種の湯賓尹本『三国志伝』を例として　大澤顕浩編『東アジア書誌学への招待』第二巻　東方書店　十一月
項橐考——孔子的傳説　中國文學學報　創刊號　北京大學中文系・香港中文大學中文系　十二月

久保昭博

後ろ向きの革命—ジャック・リヴィエールがみた前衛　*New Parisian Review*　創刊号　四月
La narratologie a-t-elle des frontières linguistiques et culturelles ?—La théorie narrative de Sadakazu Fujii. Sylvie Patron (ed.) *Théorie, analyse, interprétation des récits / Theory, analysis, interpretation of narratives.* Editions Peter Lang　六月
苦痛の形式　ふらんす　七月
翻訳　レーモン・クノー『地下鉄のザジ』　水声社　十月
サンドラールの足跡をたどって　ふらんす　十一月
戦争文学アンソロジー　出版ニュース　十一月
シュマン・デ・ダムの亡霊たち　ふらんす　三月

黒岩康博

「廃都」を記念する　人文　五八号　六月
研究者、墓を買う（買ったのは父だけど）　国史研究室通信　四三号　十月
Military Mail for a Linguist: Soldiers Who Support and Profit from the Language Studies of Masamichi Miyatake. *ZINBUN* 43.　三月

小池郁子

コンタクト・ゾーンとしてのオリシャ崇拝運動—アフリカ系アメリカ人の社会運動とキューバのアフリカ系宗教との境界をめぐって　田中雅一編『コンタクト・ゾーンの人文学：宗教文化系』　晃洋書房　三月
アメリカ黒人のオリシャ崇拝運動にみる縁の形成とジェンダー　『宗教研究』　三四六巻　三月

小関隆

産業革命の進展と社会問題　小山哲・上垣豊・山田史郎・杉本淑彦編『大学で学ぶ西洋史［近現代］』　ミネルヴァ書房、四月
コラム：アングロ・サクソンとケルト　小山哲・上垣豊・山田史郎・杉本淑彦編『大学で学ぶ西洋史［近現代］』

ミネルヴァ書房　四月
書評　G・ステッドマン・ジョーンズ『階級という言語：イングランド労働者階級の政治社会史、1832-1982年』
社会経済史学　七七巻二号　八月

高　井　たかね

明代の八仙卓について――その出現時期および用途を中心に
家具道具室内史　三号　五月
『金瓶梅詞話』牀類小考
佛教藝術　三一六号　五月
八仙卓をめぐる諸問題――名称の出現時期および明代の事例を中心に
東方学報　八六冊　八月

高　木　博　志

建国記念の日、そして「神武創業」と近代日本
アリーナ（中京大学）　四月
桜　東アジアの記憶の場（板垣竜太・鄭智泳・岩崎稔編）
河出書房新社　四月
皇室の神仏分離・再考　明治維新史研究の今を問う：新たな歴史像を求めて（明治維新史学会編）
有志舎　七月
閉鎖的な管理をやめ、古墳時代の天皇陵を公開・活用せよ
中央公論
中央公論新社　七月
今城塚と継体天皇陵の学問史・断章　三島と古代淀川水運Ⅱ
（高槻市立今城塚古代歴史館）
十月
御苑における大学の歴史教育
京都御苑ニュース　一一二号　十二月
水木要太郎と修学旅行
やまと百景　第六〇号　十二月
一八九五年、泉涌寺における皇太子明宮の病気平癒御修法
宗教と現代がわかる本　二〇一二
平凡社　二月

高　階　絵里加

〈東方三博士の礼拝〉図像における異邦人表現
人文学報　百号　七月（奥付は二〇一一年三月）
作品解説　十六点　美人画の系譜
小学館　十一月
作品解説　幸野楳嶺《秋日田家図》
國華　一三九四号　十二月
「印象派」など二項　明治時代史大辞典　第一巻
吉川弘文館　十二月
美術逍遥　日本経済新聞（夕刊）
四月一一日、四月一八日、五月一六日、五月二三日、六月二〇日、六月二七日、八月一日、八月八日、九月五日、九月一二日、十月二四日、十月三一日、十一月二八日、十二月五日、一月一六日、一月二三日、二月一二日、二月二七日、三月一九日、三月二六日

高　田　時　雄

中尊寺本金銀泥字《大唐西域記》的舊藏者――明治時期日本古籍流出的一例個案研究
國際漢學研究通訊　第三期　六月
〔解説〕平定苗疆戰圖
『乾隆得勝圖　平定苗疆戰圖』　臨川書店　七月

内藤湖南の敦煌學　敦煌吐魯番研究　第十二卷　七月
〔書評〕榮新江・李肖・孟憲實主編『新獲吐魯番出土文獻』
敦煌吐魯番研究　第十二卷　七月
《大唐西域記》卷第十一增入部分小考『佛教文獻與文學』
佛光文化事業有限公司　九月
藏書の運命――近代における中國古典籍流動の歴史『東アジアの言語・文化・藝術』
關西大學文學部・關西大學大學院文學研究科　九月
Пояснения к картинам багальных сцен《Покорения Западного края》императора Цяньлуна, Письменные Памятники Востка 2011-2　十一月
ロシア科學アカデミー東洋寫本研究所と『東洋の文獻遺産』誌など　東方學　第一二三輯　一月
新出の行瑢『内典隨函音疏』に關する小注
敦煌寫本研究年報　第六號　三月
李滂と白堅（再補）　敦煌寫本研究年報　第六號　三月

竹　沢　泰　子

◉人文學報（特集：差異の表象）百号
京都大学人文科学研究所　三月
（序論―人種表象研究の今後の課題―）
近代と人種の生成　本多俊和（スチュアート ヘンリ）・大村敬一編『グローバリゼーションの人類学―争いと和解の諸相―』
放送大学教育振興会　四月
現代におけるグローバリゼーションと人種　本多俊和（スチュアート ヘンリ）・大村敬一編『グローバリゼーションの人類学―争いと和解の諸相―』放送大学教育振興会　四月
◉移民研究と多文化共生　日本移民学会編
御茶の水書房　六月
（序論―移民研究から多文化共生を考える―）
◉今、アイヌであること―共に生きるための政策をめざして―シンポジウム報告書
京都大学人文科学研究所　八月
討論まとめ　学術の動向―今、アイヌであること
九月
◉TAKEZAWA Yasuko (ed.) Japanese and Asian Americans: Racializations and Their Resistances: Proceedings of a Japan-based Global Study of Racial Representations 2011-2012. 人種表象の日本型グローバル研究（平成二三年度研究成果報告書 別冊4）
京都大学人文科学研究所　二月
◉TAKEZAWA Yasuko (ed.) The Interface of Humanities and Genomics II: Proceedings of a Japan-based Global Study of Racial Representations 2011-2012. 人種表象の日本型グローバル研究（平成二三年度研究成果報告書 別冊5）
京都大学人文科学研究所　三月
◉人種表象の日本型グローバル研究（平成二三年度研究成果報告書）
京都大学人文科学研究所　三月

武　田　時　昌

五星会聚説の数理的考察（上）――秦漢における天文暦術の

一側面　中国思想史研究　三一号　二〇一一年三月
鍼灸パラダイム談義第四回・脱黄帝学派宣言――鍼道を志す　四月
人のために　医道の日本　八一一号
鍼灸パラダイム談義第五回・未だ病まざるを治す――鍼門の三字銘　医道の日本　八一二号　五月
鍼灸パラダイム談義第六回・魯迅の眼で見た中医―東と西の解剖学　医道の日本　八一三号　六月
鍼灸パラダイム談義第七回・血と骨のフォークロア―『洗冤録』の複眼的考察　医道の日本　八一四号　七月
明末清初の西学啓蒙と象数学　堀池信夫編『知のユーラシア』　明治書院　七月
鍼灸パラダイム談義第八回・ミイラの呪文、閻魔大王の便り――老化現象を考える（一）　医道の日本　八一五号　八月
鍼灸パラダイム談義第九回・死徴の診断術――老化現象を考える（二）　医道の日本　八一六号　九月
鍼灸パラダイム談義第十回・老子と彭祖の長生術――老化現象を考える（三）　医道の日本　八一七号　十月
刑徳遊行の占術理論　日本中国学会報　六三集　十月
鍼灸パラダイム談義第十一回・今こそ虚労病の新薬を！――老化現象を考える（四）　医道の日本　八一八号　十一月
鍼灸パラダイム談義第十二回・鍼のひびきと脳内モルヒネの唄　医道の日本　八一九号　十二月
鍼灸パラダイム談義第十三回・牛馬のツラとツボ――獣医鍼灸学のすすめ（一）　医道の日本　八二〇号　一月
鍼灸パラダイム談義第十四回・馬医絵巻の眼差し――獣医鍼灸学のすすめ（二）　医道の日本　八二一号　二月
鍼灸パラダイム談義第十五回・流れる水のように生きる――東洋的健康科学論（一）　医道の日本　八二二号　三月

田中雅一

◉Contact Zone（コンタクト・ゾーン）　四号　人文科学研究所　前年三月
コンタクト・ゾーンとしての占領期ニッポン――「基地の女たち」をめぐって　田中雅一編　Contact Zone（コンタクト・ゾーン）　四号　人文科学研究所　前年三月
癒しとイヤラシのポルノグラフィー――代々木忠監督作品をめぐって　大浦康介編『共同研究　ポルノグラフィー』　平凡社　四月
鼎談（前編）「日本の人類学」をめぐって　理　コトワリ　二七号　六月
探検と共同研究――京都大学を中心とする文化人類学　山路勝彦編『日本の人類学――植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史』　関西学院大学出版会　八月
鼎談（後編）「日本の人類学」をめぐって　理　コトワリ　二八号　九月
◉国際ワークショップ中間報告書『戦争と平和の再演――戦争映画の日中比較』　十月
名誉殺人――現代インドにおける女性への暴力　現代インド研究　二号　一月

◉公開シンポジウム報告書『越境するカワイイ！　可愛い！Kawaii！――ファッションとマンガ』（共編）　人文科学研究所　三月
◉国際シンポジウム報告書『中国についての学術的な考え方――日本からの視点』　人文科学研究所　三月
◉コンタクト・ゾーンの人文学　第三巻　Religious Practices／宗教実践（共編）　晃洋書房　三月
本書の構成――Religious Practices／宗教実践　田中雅一・小池郁子編『コンタクト・ゾーンの人文学　第三巻　Religious Practices／宗教実践』　晃洋書房　三月
◉コンタクト・ゾーンの人文学　第四巻　Postcolonial／ポストコロニアル化（共編）　晃洋書房　三月
本書の構成――Postcolonial／ポストコロニアル化　田中雅一・奥山直司編『コンタクト・ゾーンの人文学　第四巻　Postcolonial／ポストコロニアル』　京都大学人文科学研究所、晃洋書房　三月
共訳　ティモシー・フィッツジェラルド「なぜ国際関係論における宗教に注目するのか？」　人文学報　一〇二号　三月

田　中　祐理子

新刊紹介：『啓蒙の運命』　表象文化論学会ニューズレター *Repre*　一三号　八月
「非人間的」な身体の思考に向けて　シンポジウム《フランス哲学と「科学」の思考》報告書『「概念の哲学」とエピステモロジー』　三月
付論・「19世紀医学」をめぐるカンギレムとフーコーの対話　シンポジウム《フランス哲学と「科学」の思考》報告書『「概念の哲学」とエピステモロジー』　三月

立　木　康　介

トラウマ―出来事と言葉のはざまに　人文　五八号　六月
露出せよ、と現代文明は言う　第六回　「精神分析の詩学―メタファーと心的空間」　文藝　二〇一一年冬号　十月
露出せよ、と現代文明は言う　第七回　「症状なき主体たちは彷徨う」　文藝　二〇一二年春号　一月
対象の自殺、欠如としての私　臨床心理事例研究（京都大学教育学部心理教育相談室紀要）　第三八号　三月

富　永　茂　樹

言葉の力　明倫アート　第一三三号　京都芸術センター　六月
私が会えなかった人物　出版ダイジェスト　第二二二六号　出版ダイジェスト社　六月
新矛盾論　明倫アート　第一三五号　京都芸術センター　八月
暮らしの文化―国民文化祭・京都二〇一一に向けて　藝文協　第一一九号　公益財団法人京都芸術文化協会　十月
ヘルシンキ―二五年ぶりの　明倫アート　第一三九号　京都芸術センター　十一月

調査報告　加藤秀俊@zinbun.kyoto-u.ac.jp　アリーナ　第一二号　中部大学　十一月

富士山、空虚な中心としての　明倫アート　第一四二号　京都芸術センター　二月

知られていない「きのう」と見えてこない「あす」のあいだで—京都市文化政策の歴史　京都市文化政策史研究会　三月

冨谷　至

◉中国義士伝　中公新書　十月

◉四字熟語の中国史　岩波新書　二月

◉*Capital Punishment in East Asia*　京都大学学術出版会　二月

藤井俊之

ベンヤミンのシュルレアリスム論——「内面性」の崩壊とイメージ空間の出現　文明構造論　七号　九月

藤井律之

和製類書所引《説苑》小考　敦煌写本研究年報　第六号　三月

藤井正人

The Samavedic Sakha Backgrounds of the Jaiminiya-Upanisad-Brahmana and the Chandogya-Upanisad: A Comparison. Symposium International: Le Livre. La Roumanie. L'Europe.　九月

船山　徹

Kamalasila's View on Yogic Perception and the Bodhisattva Path. Helmut Krasser *et al.* (eds.) *Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis: Proceedings of the Fourth Dharmakirti Conference, August 23-27, 2005, Vienna.* Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.　四月

The *Fanwang jing* (*Scripture of Brahma's Net*) in the First-edition Tripitaka Koreana: A Preliminary Survey. 高麗大蔵経研究所・金剛大学校仏教文化研究所編『大蔵経：二〇一一年高麗大蔵経千年記念国際学術大会』　六月

大乗戒——インドから中国へ　桂・斎藤・下田・末木編『シリーズ大乗仏教、第三巻、大乗仏教の実践』　春秋社　十一月

認識論——知覚の理論とその展開　桂・斎藤・下田・末木編『シリーズ大乗仏教、第九巻、認識論と論理学』　春秋社　一月

文化接触としての仏典漢訳——「格義」と「聖」の序論的考察　コンタクトゾーン四　一月

◉真諦三蔵研究論集（編著）　京都大学人文科学研究所　三月

真諦の活動と著作の基本的特徴　真諦三蔵研究論集　三月

水　野　直　樹

日本人が見た植民地朝鮮　高麗美術館館報　第八九号、五月

植民地期　政治史　朝鮮史研究会編『朝鮮史研究入門』　名古屋大学出版会、六月

書評・紹介　柳宗鎬著（白燦訳）『僕の解放前後：1940-1949』（春風社）　朝鮮史研究会会報　第一八四号、八月

韓国独立運動を助けた日本人―弁護士布施辰治の活動と思想―『韓国独立運動と外国人』（独立記念館独立運動史研究所主催国際学術シンポジウム論文集、ソウル）　八月

한국병합 기념비 앞에서　미야지마 히로시외지음（최덕수외옮김）『일본、한국병합을 말하다』열린책들、八月

（「韓国併合記念碑の前で」宮嶌博史ほか著（チェ・ドクスほか訳）『日本、韓国併合を語る』ヨルリンチェクドゥル、ソウル）　八月

咸鏡北道における思想浄化工作と郷約・自衛団『一九四〇年代日帝の支配政策―創氏改名と朝鮮社会の変化―』（延世大学校近代韓国学研究所第八回国際学術大会論文集、原州）　十一月

◉京都と韓国の交流の歴史　第五集　韓国民団京都府本部　十二月

朝鮮における戸籍制度の展開―朝鮮王朝時代・大韓帝国期から植民地期へ―『東アジアの近代』（成均館大学東アジア学術院・東京大学東洋文化研究所・京都大学人文科学研究所共同主催学術会議論文集　一月

創氏改名時代の族譜―父系出自集団の対応に注目して―（板垣竜太と共著）韓国朝鮮文化研究（東京大学）第一一号　三月

宮　紀　子

ブラルグチ再考　東方学報　八六冊　八月

◉ユーラシアの東西を眺める――歴史学と環境学の間――（共著）　総合地球環境学研究所　三月

カラ・ホト出土文書の対訳語彙集断片について　窪田順平編『ユーラシアの東西を眺める』　総合地球環境学研究所　三月

Mongol baqši と bičikči たち　窪田順平編『ユーラシアの東西を眺める』　総合地球環境学研究所　三月

宮　宅　潔

新・中国学のヒント（一一）中国古代刑制史　東方　三六三号　五月

中国古代軍事制度研究の試み　中国出土資料学会会報　四八号　十二月

書評　高村武幸著《漢代の地方官吏と地域社会》（孫正軍訳、中国語版）　日本中国史研究年刊（二〇〇九年度）　上海古籍出版社　十二月

向　井　佑　介

北魏平城時代の仏教寺院と塑像　仏教芸術　三一六号　五月

契丹の徙民政策と渤海系瓦当　『遼文化・慶陵一帯調査報告書二〇一一』　京都大学大学院文学研究科　九月
中国における瓦の出現と伝播　古代　一二九・一三〇号　九月
曹魏洛陽の宮城をめぐる近年の議論　史林　九五巻一号　一月

麥谷邦夫

關聖帝君前史　『關帝信仰與現代社會國際學術暨皈依科儀研討會會議論文集』　十月
科研成果報告書「『道藏輯要』と明清時代の宗教文化」（編）　三月

村上衛

清末沿海経済史　近きに在りて　五九号　五月
書評　岡本隆司『中国「反日」の源流』　中国研究月報　六五巻一二号　十二月
清末廈門的英籍華人問題　森時彦編・袁広泉訳『二十世紀的中国社会』　社会科学文献出版社　十二月
零丁洋と広州のあいだ――一八三〇年代カントンアヘン貿易の利権　斯波義信編『モリソンパンフレットの世界』　東洋文庫　三月

森時彦

両次世界大戦之間的日資紗廠与高陽織布業　近代史研究　四期　七月
新型地方志与新編地方志　『方志文献国際学術研討会論文彙編』　八月
辛亥革命前後長江流域的綿製品流通　『紀念辛亥革命一〇〇周年国際学術研討会論文集』四　十月
辛亥革命前後四川綿製品流通動向　『四川辛亥革命暨尹昌衡国際学術研討会論文集』　十月

◉二十世紀的中国社会（編著、袁広泉訳）　社会科学文献出版社　十二月
二十世紀河北省新河県的社会流動与戸口変化動向　森時彦編・袁広泉訳『二十世紀的中国社会』　十二月
The Reception of Political Economy in the Late Ch'ing: With a Focus on Liang Chi-ch'ao, *Acta Asiatica* 102　二月
清末中国吸納経済学路径考――以梁啓超為中心　劉鳳云等編『清代政治与国家認同』下　社会科学文献出版社　三月

守岡知彦

東洋学文献類目のセマンティックWiki化の試み　情処研報 2011-CH-91(6)　七月
Multiple-policy character annotation based on CHISE　Proceedings of Osaka Symposium on Digital Humanities (OSDH) 2011　九月
A Prototype of a Classical Chinese Morphological Analyzer based on MeCab, *Proceedings of Osaka*

Symposium on Digital Humanities（*OSDH*）*2011*　九月
漢字字体情報の安定的な交換について　人文科学とコンピュータシンポジウム論文集「デジタル・アーカイブ」再考
――いま改めて問う記録・保存・活用の技術　情報処理学会シンポジウムシリーズ Vol. 2011, No. 8　十二月
古典中国語形態素コーパス編集システムの開発　東洋学への コンピュータ利用　第23回研究セミナー　三月

矢木　毅

◉韓国・朝鮮史の系譜　塙書房　三月

安岡　孝一

人名用漢字の新字旧字「摂」と「攝」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　四月七日
人名用漢字の新字旧字「高」と「高」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　四月二一日
人名用漢字の新字旧字「旺」と「曜」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　五月五日
リサイズとリフロー　第六回ワークショップ：文字「電子書籍の夢、EPUBの現実」　五月七日
人名用漢字の新字旧字「吉」と「吉」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　五月十九日
拓本文字データベースの構築　日本語学会二〇一一年度春季大会予稿集　五月二八日
人名用漢字の新字旧字「肇」と「肇」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　六月二日
人名用漢字の新字旧字「隷」と「隸」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　六月十六日
人名用漢字の新字旧字「父」と「父」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　六月三〇日
人名用漢字の新字旧字「栖」と「棲」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　七月十四日
人名用漢字の新字旧字「湿」と「濕」　三省堂ワードワイズ・ウェブ　七月二八日
タイプライターに魅せられた男たち：序文　三省堂ワードワイズ・ウェブ　八月十一日
タイプライターに魅せられた男たち：クリストファー・レイサム・ショールズ　三省堂ワードワイズ・ウェブ　八月二五日・九月一日・八日・十五日・二二日・二九日・十月六日・十三日・二〇日・二七日
Toward a Syntactic Analysis of Classical Chinese Texts　Osaka Symposium on Digital Humanities 2011　九月十四日
タイプライターに魅せられた男たち：フランク・エドワード・マッガリン　三省堂ワードワイズ・ウェブ　十一月三日・一〇日・十七日・二四日・十二月一日・八日・十五日・二二日・二九日・一月五日・一二日・一九日
漢代から現代に至る拓本文字データベース　『現代中国のジ

レンマ―胡錦濤時代の十年を考える』ＮＩＨＵ現代中国地域研究拠点連携プログラム第五回国際シンポジウム資料集　一月二一日
タイプライターに魅せられた男たち：ドナルド・マレー三省堂ワードワイズ・ウェブ　一月二六日・二月二日・九日・十六日・二三日・三月一日・八日・十五日・二二日・二九日・四月五日・十二日
ＷＥＢの記号・絵文字・顔文字　日本語学　第三一巻第二号　二月十日
モールス符号の暗記法　日本医事新報　四五八一号　二月十一日
マンガにおける異本研究　情報の構造とメタデータ　二月二四日
ＵＣＳにない住民基本台帳ネットワーク統一文字　東洋学へのコンピュータ利用　第二三回研究セミナー　三月十六日
イベントレポート「東洋学へのコンピュータ利用」第二三回研究セミナー　人文情報学月報　第八号　三月三〇日

山崎　岳

双嶼覆滅前後東南沿海的法治問題　会議資料『舟山双嶼港国際論壇文集』　七月

山室信一

アジア人の風声　姫路文学館紀要　一四　四月
郷土を世界に拓く―牧口常三郎の空間学的視圏とその現代的意義　創価教育　四号　四月
多難興邦　京都新聞朝刊　四月一一日
政治の溶融　現代のことば　京都新聞夕刊　四月二七日
◉新秩序の模索　和田春樹・山室信一ほか編『東アジア近現代通史』五巻・通史　五月
信なくんば立たず　現代のことば　京都新聞夕刊　六月二九日
紙碑として、里程標として　『新聞と戦争』朝日新聞出版・解説　七月三〇日
明治国家に宿命づけられた相反するベクトルの追究　『歴史群像・大日本帝国の興亡1』　八月
痛定思痛　現代のことば　京都新聞夕刊　八月二四日
◉和解と協力の未来へ　和田春樹・山室信一ほか編『東アジア近現代通史』
一〇巻・通史　八月
森崎和江氏に聞く　和田春樹・山室信一ほか編『東アジア近現代通史』別巻　九月
巡る季節の中で　現代のことば　京都新聞夕刊　十月二六日
余と到―読書をめぐる三と四　『読書のとびら』岩波文庫　十一月
維新と革命の連鎖―滔天・夢の軌跡　熊本日日新聞　十二月九日
帝国形成における空間認識と学知　翰林日本学（翰林大学校日本学研究所）一九輯　十二月
情報公開　現代のことば　京都新聞夕刊　二月二三日

日本が戦い抜いた二つの実戦と三つの外交戦　『歴史群像・大日本帝国の興亡3』

横　山　俊　夫

「老いを楽しむ」④、（企画、編集、執筆）「フォーラム新・地球学の世紀32　達老志願者への手引き―前近代の日本から、文明論風に」WEDGE　四月

◉*Sansai, An Environmental Journal for the Global Community*, Tracey GANNON and Toshio YOKOYAMA (eds.), No. 5, 2011　四月

Memories of Dr Carmen Blacker OBE, FBA（1924–2009）、右掲 *Sansai* No. 5 所収　四月

◉『第28回2010年比叡会議報告書「21世紀に求められる文明とは何か　その1／部分と全体」』（共同企画、編集、趣意書執筆）日本アイ・ビー・エム株式会社　四月

Report of the 11th Project Evaluation Committee（共同作成、第11回研究プロジェクト評価委員会報告書／CD版）Research Institute for Humanity and Nature（総合地球環境学研究所）　四月

「梅棹文明学の来た道　鼎談」（横山俊夫、やなぎみわ、山極寿一／河野通和氏と共同企画・共同編集）『考える人』2011年夏号　新潮社　七月

「三才学林における平成22年度の研究教育支援活動」ならびに「地球環境学堂における平成22年度研究活動／地球文明論分野」、「地球環境学舎における平成22年度教育活動」、「個人教育研究活動／地球文明論分野」。『京都大学大学院地球環境学堂 地球環境学舎 三才学林　年報 平成22年度』　十月

◉嶋臺塾記録　第七冊（企画・編集）　京都大学大学院地球環境学堂　三才学林　二月

三才学林 Sansai Gakurin/Grove of Universal Learning（共同執筆）、『京都大学大学院　地球環境学堂・地球環境学舎・三才学林　ガイドブック2011　Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University』　三月

◉『ことばの力―あらたな文明を求めて』（編著）、京都大学学術出版会　三月

（なお、京都大学人文科学研究所を発行者とする、同一内容の非売版を二〇〇部限定で同月に刊行。）

「十八世紀日本の言葉なおし―浪華のものしり山本序周の場合」（右掲書所収）　三月

人文
第五九号
二〇一二年六月三十日
京都大学人文科学研究所発行
共同印刷工業
非売品